

ぬ、其淺ましきはドンなて有らう、其れが犬猫ばかりでは無い、同じ人間の身に生れても、丸々教の無い野蠻の者は、父母の名字も知らぬか、知らぬか、況して孝行など云ふことが有るとも知らぬ、淺ましいのが、随分世間に無いとは言はれぬ、マシテ况んや、佛法僧の三寶など云へる、殊勝なお名は一生聞かずに、闇冥から聞きに迷ふて、ボチリとも教の光を見ずに、三惡道に立返ッテ、苦患に苦患を重ねる者は、幾らあるとも知らぬ程じや、然るに斯くまで淺ましい犬猫同然のもので有つても、俚諺に云ふ、苦しい時の神だのみて、病氣災難その他何事でも、苦しい悲しいことが起ると、遂に神だのみを始める氣に成るから、ソコへ色々な惡魔や鬼神が附け込んで、馬鹿馬鹿しいことに迷はされて飛んでもないものを信仰するから、助かるべき命も助からず、免がれる災難も免れられないやうに成るのが多い、其事を高祖大師が感れませられて、徒らに所遁を怖れて

山神鬼神等に歸依し、或は外道の制多に歸依すること勿れとのお誡めじや、所遁と云ふはセマレレルと讀む字で、都べて苦しいとか悲しいとか思ふことを云ふのです、山神はヤマのカミ、鬼神はオニカミと讀むので、天竺にも韓唐土にも智惠のない人たちは、其んなものを信心するのが多いと見えて、ドコの國でも色々な神々を祭ると見える、サテ又外道の制多と云ふのが尤も氣を附けて置かねばならぬこととて、外道と云ふはホカのみチと書き、凡そ佛法の教の外に色々な道理を立て、教の道としてあるのが皆外道でありますから、儒者の道でも日本の神道でも皆外道には違ひないけれども、中に就く近頃西洋から弘まつて來た耶蘇教と云ふ教法には、殊に氣を附けて迷はんやうにせんければならん、ナセかと云ふに、彼の耶蘇教と云ふ教法では、獨一眞神とか申して、世界の間に神と云ふ者は、只ゴットと云ふ神一位しかない、其外は皆神でも何でも無

いに依て、若し心得違ひをしてゴットの外には神があると思ふて、其れを祭るやうなことを仕れば、必ずゴットから罰をあてられ、と教へる様子であるから、凡そ耶蘇教を信仰するものは、ゴットの外に神は無いと信じて、天照太神でも八幡宮でも皆神では無い、祭るべきものではないと云ふのであるが、我が日本で天照太神や八幡宮をお祭り申しあげるのには別に深き子細のあることで、若し萬一にも日本人が天照太神も八幡宮も乃至すべての官國幣社にお祭り申してある神々も祭らんで好いと云ふやうな料簡に成つたら、モハヤ我が日本の國躰は破れてしまふ。假初にも國躰が破てしまつては我が日本は亡びたと申すもの。此事は實に國家の一大事に關係することであるから、骨身に徹して染々と心得て置かねばならぬ。然しながら委しいことは一朝一夕の話では無いに依つて、又此後に追て、委しくお話に及びましやうが、近頃は救世軍など

と申すのが、何やら物珍らしい仕掛で、智慧の無い貧窮人や、飛び上りものを當込に賑はしい布教をすると云ふ噂もあるから、ウカウカ迷はんやうに心懸ねばならん。箇様に申したなれば、生意氣な考へをする人は、直に突掛つて来て、コウ云ふかも知れん。成るほど耶蘇教では、ゴットの外に色々な神を拜んではならんと云ふに違ひないけれども、佛教も亦た其れと同じこととて、現に今も山神鬼神等に歸依すること勿れと云ふてあるでは無いかなどと、口利口に難問するものも有るかは知らんが、其れは大なる間違ひで、未だ佛法の道理が分らんからの事で、御座る。ナセかと申すに、一佛法の上にて於ては佛の外に色々な神が無いとは言はん。天上界には色々な天神もあり、修羅道や鬼趣の類には又其れ／＼の鬼神も多く、中々威力の盛んなものであると云ふことは、最初から信ぜねばならぬので、然ながら今吾々互ひが教法を信仰して佛や菩薩に歸依

するのは何の爲めてあるかと云ふに其事は修證義の第一節に生
を明らめ死を明らむるは佛家の一大事の因縁なりとある通り生
死の一大事に安心決定することが出来て煩惱業苦を解脱し盡し
菩提涅槃の悟りを開き三世の諸佛と同じやう無上の勝果を得や
うと云ふのが目的じや然るに彼の山神にせよ鬼神にせよ如何ほ
ど威力があるにもせよ菩提涅槃を吾人に授け與へると云ふわけ
ては無い譬へば病氣は醫者に掛るが好い壁を塗ることは左官に
限ると云ふやうなもので幾ら陸軍大將が強からとても病氣を直
してくれろと云ふわけには往かん何ほど總理大臣がエライと云
ふても壁を塗るとは出来ずまい其れと同じて幾ら色々な神が
有ても無上菩提の悟りを開いて生死の大事を明らめると云ふこ
とは佛法僧の三寶に歸依したてまつるより外に道は無い况んや
我國の天照大神や八幡宮は申しあぐるにも及ばず都べて宮國幣

社などにお祭り申してある神々は最初から吾人の悲しい苦しい
病氣災難などを助けて下されうとの本願でも無ければ本より其
んなわけでお祭り申すのでは有りません其れ故に祭らねばなら
ぬ神々を國の風俗禮儀として之をお祭り申すのは本より佛教の
本意であるけれども歸依するといふは其んなことでは無いソコ
の道理を能く聞き分けて決して間違はぬやうにせんければなら
んしかるに世間ではコゝの區別を辨へず只ひやみに拜みさへす
ればその神様から御利益を受けられてどのやうな事も願が叶ひ
如何なる難病も立ちどころに平癒し死ぬるものも助かるやうに
思ひ込んで種々なものを祭りたて騒きまわり只そのために利益
を得ることの出来ぬのばかりでなく却て一層の苦しみを重ね助
かるべき命をも取り失ふものが澤山にあるが賊に氣の毒千萬な
る次第である勿論斯様な淫祠邪教を弘めるのはよろしくないこ

とてはあるが、これは何時の世何れの國にも絶えぬことであるから、手前て用心して決して斯様な教に惑はめやうに致さねばならぬ。近頃彼の天理教といふものがとりわけ諸國に盛に行はれて、この教に入つた爲めに莫大の財産を夫ひ先祖傳來の家屋敷までも賣り拂ふほどに貧乏となり、又は病氣に罹つたといふて天理王の命を信じて、これによつて病苦を免れんと思ひ、トンダ目に逢ふ者がある中に、大坂市南區難波新地四番町七十四番地の妓樓新盛樓の主人鈴木イトといふ者の弟に中野喜次郎といふ者があつて、其の頃年は未だ二十九歳の青年であつたが如何なることか天理教を信じてはじめて、遂には大の信徒といふ格になり、朝から晩まで天理王の命といつて踊り狂ふことを何より樂しみ、天理王の命の御水さへ戴けば如何なる難治の重病でも必ず平癒せぬといふことはない、自分にも信じ又人にも勧めて居たが、フト肺病に罹り、日

々顔色も青ざめ、身體も次第に衰弱し、吐く痰汁にも血が交つて出るやうになつて來たので、姉のイトは大いに心配を致し、醫者よ薬よと勧めるけれども、本人の喜次郎は更に受け付けず、ナニ天理王の命さへ信心すれば、醫者も薬も要つたものでないと云つて、頻りに只天理王の命の御水ばかりを呑んで居ました。加やうなことでどうして肺病が平癒致しませう。病は日を遂ふてますます劇くなるに、本人は諸方の教會に參詣して、天理王の命と踊り狂ふて居る中、いよゝゝ重病となり、今は命も且夕に迫つて來たから、名醫を呼び迎へて診察を乞ひました。最早致方がないといふので、何れも手を引いたところから、茲に始めて喜次郎は天理王の命の利益のないことを覺り、氣も狂はんばかりに怒つて、ア、怨めしや天理王の命と、聲をあげてとなり叫びつゝ、居たが終に明治廿六年六月六日の夕方に、周圍に人の居ないを窺ふて、自分の帯を鴨居

にひき懸けて首を縊つて死んで仕舞つたと申す。ナント各々方如何にも馬鹿々々しいことではありませぬか。しかし平常は大口をキツて居ても、一朝苦しい難儀な目に出逢ふと、どうぞしてその苦を免れやうとして、色々の物に祈誓祈願をするやうになる。これが大いなる間違で、決して苦難を免れることはない。それ故に高祖大師は、彼れは其の歸依に因りて衆苦を解脱すること無しと仰せられ、又其三寶に歸依したてまつることに就いては、早く佛法僧の三寶に歸依したてまつりて、衆苦を解脱するのみに非ず菩提を成就すべしとの御教訓じや、實に其菩提を成就すると云ふことが目的であるに依つて、其れには受戒が肝要じや、受戒するに就いては先づ第一に三歸依を受けねばならず、三歸戒を受けるに就いては、今日の賛題に備へた御教訓を身にシミくと戴いて餘處に心移さず、専ら三寶の功德を思ひたてまつり、寐てもさめても南無歸

依佛、南無歸依法、南無歸依僧と唱念する心得てなければならぬ。ソコデ始めて佛弟子の仲間に入り、頓て三聚淨戒十重禁戒と次第に佛戒を受ければ、即ち諸佛の位に入り、位大覺に同じうし已るといふ果報になる。サテ其上の發願行持心うれしく世渡りして幾分なりとも利生報恩、嗚呼曹洞宗の信者ほど立派なものはないぞよと世の手に本にされるやう、一日なりとも成り課ふせたら、其れこそ佛祖正傳の戒脈うけた甲斐もあると申すものであるから、どうぞ心得違のないやうに、高祖大師の御教訓を忘れず、仕る事爲す事の上、に御教訓が一々あらはれてゆくやうにするが肝要。

○参考

○いまわれら宿善のたすくるによりて、如來の遺法にあひたてまつり、晝夜に三寶の寶號をきいたてまつること、時とともにして不退なり、

これすなはち法要なるべし。天魔波旬なほ三寶に歸依したてまつりて患難をまぬがる。いかにいはんや餘者の三寶の功德におきてはかりしらざらめやは(正法三寶)
○いたづらに鬼神の眷屬として一生をわたり、むなしく邪見の流類として多生をすごさん、かなしむべし。(上全)
○しかあればすなはち世間の苦厄すみやかにいはなれて、無上菩提を證得せしむること、かならず歸依三寶のちからなるべし。(上全)

○一たびも佛をたのむこゝろこそ

(蓮如上人)

○のがれなきおいの闇路を獨り旅

(十阿律師)

○櫓もかひも我とは取らて法の道

(聖徳太子)

たゞ船主にまかせてぞゆく

第十三節

其歸依三寶とは正に淨信を専らにして、或は如來現在世にもあれ、或は如來滅後にもあれ、合掌し低頭して口唱へて云く、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧、佛は大師なるが故に歸依す、法は良藥なるが故に歸依す、僧は勝友なるが故に歸依す、佛弟子となること必ず三歸に依る、何れの戒を受るも必ず三歸を受けて、其後諸戒を受るなり、然れば則ち三歸に依りて得戒あるなり。

修證義の第十三節を讀みあげました、此一節の御教訓は三寶に歸依する仕方と、何故に歸依するぞと云ふ譯合と、三歸戒を受けなければ外の戒を受けられんと云ふ道理とを、三段にも示し下されたのじや、先づ第一に三寶に歸依する仕方と申すは、正に淨信を専らにしてと仰せられる實に人は信と云ふほど大切なものは無い、

孔子の教にも仁義禮智信と云ひ、又は忠信孝悌といひ、イッレにして
ても信の一字は缺されぬに依て、民信なくんば立たずとも言はれ
てある、况んや我が佛教に於ては、信は道元功德の母よくもろく
の善法を生ずと有て、道の元は信であるぞ、功德を生み出す母親は
信であるぞと仰せられてあるが、畢竟信は信心とも云ひ、信仰とも
申して、一點の疑ふ心なく偽はる心のない、眞實まことの心である
から淨信と仰せられた。淨はキヨイと申す字で、賊にうつくしく潔
ぎよい心のことじや、サテ箇様に美しく潔ぎよい心を以て、如來
現在世にもあれ、或は如來の滅後にもあれ、大聖世尊の釋迦牟尼如
來が此世におはしまし、時のことは申すに及ばず、設ひ今日三千
年の末の世に生れあはせ、た吾々ても、必らず合掌し低頭して口に
唱へて曰く、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧、前に淨信を専らに
せよと仰せられたは、意業の歸依、合掌低頭と仰せられるは、手を合

せ頭を下げ、身業の歸依、口に唱へて南無歸依佛、南無歸依法、南無
歸依僧と申すのは、口業の上の歸依であるから、コレで身口意の三
業が成就する何事に就けても身と口と意の三つが揃はんては佛
教信者と申されない。口先ばかりで何程の高尙微妙な理窟を云ふ
ても、身の行ひや意得かたが其れに相應せんければ、口ばかりは佛
に成るかも知れんが、身や意は地獄の滓じや昔く、或人が地藏菩
薩に連れられて極樂世界の博覽會を拜見に參つたところが、其は其
は尊といやら珍らしいやら色々の御品を拜見いたした中に、極樂
には不相當なと思はれる變なものが積である。ハテサテ是れは何
で有らふぞと熟々見るに見れば見るほど娑婆の正月の取看など
に使ふ數の子に違ひないやうであるから、地藏菩薩にお問ひ申し
あげた。ドゥ云ふわけて極樂に數の子などを貯ひに成てあるこ
とて御坐りましやうぞと申しあげたら、地藏菩薩がお笑ひなされ

て成るほど其方が數の子と見違ひたも無理は無いがコレは決して數の子ては無いぞ十方世界の僧俗の中には口先ばかりて佛法を説くものが多いに依て其舌だけが往生して箇様に澤山集まつて居るが舌ばかりては生きて居れぬに依て皆この通り干物に成てしまふたぞと仰せられたと云ふこととせやカク申す某甲などもドウぞ數の子には成らぬやうに致したいと心懸けて居ることじやが各々方も口ばかりてなく身にも意にも染々と南無歸依佛南無歸依法南無歸依僧と寝ても起ても唱へなされませ今の數の子の話で思ひ出したとて有る昔し支那の宋の世の頃に明教大師と云ふ有難いお方が有て其頃の儒者の中でも尤も天下に名の高い歐陽永叔など云ふ人も思はざりき僧中に此人あらんとはと云ふて感服したとある名僧で有たが其お方が無ならせられた時に例の如く火葬をしたところが外のところは皆灰に成たけれ

ども舌と平生お持ちなされた珠數だけはソツクリ焼けず皆お舍利に成たと申すこととせやコレは全く一生の間虚言偽語を言はれなんだ靈験で有らうと申してある虚言偽語を言はんと云ふのは即ち口に云ふたことを身にも意にも其通りタシカニ行はれたと申すこととせや其れに就ては口に唱へる南無歸依佛と云ふことが如何なることと有るぞと云ふことを能々心得て置かんければ只口真似をするると云ふことに成るソレでは中々數の子にも成れんて有らうサテ南無と申すことは天竺の詞でコレを漢語にすれば歸命とも歸依とも云ふことになる歸命の歸の字はトツクと讀ませて處女たちがお嫁入をするると云ふ意味の字じや處女たちがお嫁入をするには身も心もすべて皆さきの夫に打任せて少しも自分の勝手を働らかぬ通り吾々各自の身も心も皆悉く佛法僧に打任せたてまつりて少しも自分の我見を張らぬソコが歸命の

歸の字の心じやソコで命の字は仰せと云ふ字で君命だの天命だ
のと云ふ如く仰せ付けとか御指圖とか云ふことゝ即ち歸命の二
字で佛の仰せ付けは随ひたてまつる法の御指圖に任せたてまつ
る僧の心に背きませんと云ふことになる歸依と云ふも同じ心で
依の字はヨリソフと云ふ文字、ヒタリと着き合ふて離れない姿じ
やに依て南無佛とばかり申しても歸依法とばかり申しても意味
に不足はサラ／＼無いが昔からの仕來りて南無と云ふ天竺の
詞と歸依と云ふ漢語とを二つ重ねて南無歸依佛南無歸依法南無
歸依僧と唱へることに成て居る尤も宗旨／＼に依ては少しつ
唱へかたに違ひも有らうが、ドコの宗旨でも三歸だけは唱へない
所は無いサテ又佛法僧の三寶と云ふこともお話せんでは満足せ
んが、其れは常々くれ／＼もお話し致してあることと有るから、今
日はマゝ其方はお預りと致して、次に何故三寶に歸依するぞと云

ふわけあひ、佛は大師なるが故に歸依す、コゝが誠に大切なところ
で、イツもながらお話し申してある通り、我が曹洞宗は淨土門など
とは違ひ、自力すなはち自分の力で懺悔受戒の功力に依り、此身こ
のまゝ三世の諸佛と同じ仲間の大覺位に入るのてあるから、同じ
佛に歸依すると云ふても、他力門の眞宗などで阿彌陀如來に歸命
するのとは頓と様子の違ふたことと、眞宗などは阿彌陀如來の他
力に随つて未來後生に佛に成らせて戴たくと云ふので有るから、
自分の力は少しでも用ゐるわけに往かんと云ふ話であるが、我が
曹洞宗はソウでは無い佛と衆生の間がらを弟子と師匠と見るだ
けのこととて懺悔と云ふも受戒と云ふも、皆只佛の御教を受け、其
儘自分に行ひ、其行なふた力に依て滅罪入位の果報がある、丁度學
校の教員方が生徒に物を教ふるのと同じ道理で、何程教師が慈悲
深くても、生徒に其氣の無いうちは、何として見やふも無い、ソコで

釋迦如來は今はの際の御遺言にも我は良醫の病を知て薬を説くが如し服と不服とは醫の過に非ずと仰せられてある。トニカク自から信心を勵まして佛祖の御教を疑ひなく其儘に行はねばならぬのじやサテ法に歸依するわけは法は良薬なるが故に歸依す。良薬と云ふはヨイクスリと申すこととて丁度吾々一切衆生が妄想煩惱に苦しんで居る有様は病氣の爲めに身体が苦しいのと少しも違はんソコで煩惱を断じ妄想を除くもろくの法門を病を直す薬に喩へて良薬と仰せられた凡そ薬と申すものは疑ひなく信じて吞むが好い且つ又薬は最初から苦いものと得心して吞むが好い其苦いのを忍び堪えて信じて其れを吞みさへすれば知らず知らず病は直る佛祖の教に打ち任せて設ひ窮屈ても面倒ても教のまゝに信仰して其通りにさへ行なへば知らずく此まゝ佛じや其れに就ては其教を説き傳へて下さるゝ僧侶に歸依するが

肝要じやに依て第三には僧は勝友なるが故に歸依す僧と云ふことはイツも申す通り和合衆と翻譯するので多くの坊さんと云ふことじや勝友と云ふ勝の字はスグレムマサルと云ふこととて友はトモダチと云ふことぢや實に人間は友だちが大切に朱に交はれば赤くなること云ふ通り友だち次第で善い人も悪くなり麻の中の蓬と云ふ喩も有てヒチクリたがる蓬のやうな變な草でも眞直に生立つ麻畑の中で育てば知らずく直になると云ふことじや情を有たぬ草でさへ其うあるに萬物の靈長とも言はるゝ身て交はる友を擱ばんては人に生れた甲斐が無い孔子も益者三友と申して益になる友だちが三通りあると言はれてゐるその孔子の教を弘められた孟軻といふ人は幼少の時に父に先たれて母親の手一つで育てられたがその母親が賊に賢婦であつて何んでも自分の一子を程能く育て上げて成長の後天下人民の爲めになるや

うに致さんものと、日夜心を込めて養育して居られたが初の程は住家が墓場の近くであつたので、孟軻の嬉戯にも葬式の真似ばかり致して遊ぶのを見て、これは吾が子を育てる處でないと思ふて、市中に家に移された。すると今度は物の賣買やら金銭の取引などの真似を致して遊ぶから、こゝも子供を育てる場處でないといふので、又學校の側に引越された。すると今度は書物を読んだり、粗豆といふて神様や先祖を祭る道具を列べて、その禮式の真似をして遊ぶやうになつたから、孟軻の母親は大いに喜ばれて、こゝこそ眞に吾が子を育てる處であるといふて、それから一層心を込めて教育せられたから、段々學問も昇進して遂に他國に修業に出て、四五年を経てから孟軻が母親の處へ歸つて來られた。スルト孟軻の母親は丁度その時機を織つて居られたが、剪刀を以て今しも織つて居た機をスカ／＼と截つて仕舞れたから、孟軻は大いに驚いて、何

故左様の事をなされますと問はれると、母親の云はれるには、卿が學問も未だ成就せぬに中途にして家に歸つて來たのは、丁度この機を中途で截つたと同じ事で、何の役にも立たぬと云はれた。ソコデ孟軻も自分が悪かつた。とシミ／＼後悔せられ、再び他國に出て非常に學問を勵まれたによつて、遂に孔子に續くほどの大賢人となられた。この事は孟母三遷の教、又孟母斷機の誠と申して、『小學讀本』にも出て居るであらふが、兎に角名高い話であるから、定んで疾くにも御存知であらふ。サテ孟軻は千古の大賢といはれるほどの人であるから、天資も並々の者より勝つて居たでもあらうが、左様な賢婦の母親の手に育てられ、朝夕能く母親の教を守つて之を行ひ、又學校の側に居て善い友達と交つて、見慣聞慣の間に自然に善いことを覚え、其上聖人の道を學ばれたればこそ、後世まで賢人の譽を傳へられたのである。今三世諸佛は一切衆生は皆吾が子

なりと仰せられ、又人天の大導師と宣ひ、末世の吾々御互が母親なり師匠であると思召れ、吾等が無明煩惱の病をなほす良薬なる無上の大法を御説きなされ、其の上にも其の良薬を御取次する勝友の僧侶をも御付遊し置かれたれば、各々方も孟軻がその母親の教に随ひ、學校の學生と交り、聖人の道を修めし如くに、佛法僧の三寶に歸依せんければならぬのちや、サテ之を一つの戒法と定めて授ける受けるの儀式に掛け、三世の諸佛に誓を立て、生々世々三歸を持ち、決して邪教や外道には歸依すまいぞと治定する、ソコ始めく眞實の佛教信者と定まるに依て、ドンな戒でも受けられる、サもない内はドのやうな受戒の儀式に預かつて、何ほど道理が分つても皆んな戲論と云ふものじゃ、其れゆゑ佛弟子となること必ず三歸に依る、何れの戒を受るも必ず三歸を受けて、其後諸戒を受るなり、然れば則ち三歸に依て得戒あるなりと仰せられてある、諸

戒と云ふは一口に戒法とは申すもの、在家戒に出家戒、小乗戒に大乘戒、五戒八戒十善戒、比丘には二百五十八戒、比丘尼となれば五百戒、三千の威儀、八萬の細行など、色々差別のあることなれど、就れにしても第一に先づ三歸戒を受けなければ、何れの戒も受けられぬ、ソウして見れば、三歸の蔭で外の戒法をも受けられると云ふものぞとの御教訓じや、箇様に諸戒のある中に、佛祖正傳、嫡々相承、水も漏さず傳はつたは、我宗所傳の佛戒じや、此身此儘諸佛の位、位大覺に同じうし、已るに依て直に佛戒と名けらるゝ、其佛戒を受け得たる曹洞宗の信者と成て、眞に是れ諸佛の御子と讃歎される所詮と云ふは、さしたる難儀なことでは無い、仕ること爲すこと、其儘に發願利生行持報恩、ねても起ても衆生のため、食ふも着るも御恩報謝と日夜の營み怠たりなく、人々各自の本分を盡すが何よりの肝要じや。

○参考

○嬰兒にして母あらざれば、懷子依る所なく、必ず死すること疑慮なく、豺狼悉く走歸せん。衆生佛に歸せずんば、魔鬼總べて來て繞圍せん。(住十)

(論心)

○佛は是れ衆生の大悲の父なり、亦是れ出世増上の良縁なり。其の恩徳を計るに、塵劫を過ぎて、之を述ぶるも盡くし難し。(法華)

○若し法を聞くこと有る者は、一として成佛せざることなし。(法華)

○譬へば闇室の中に燈なくんば、見るべからざるが如し。佛法も人の説くことなくんば、慧なりと雖も、能く了ずることなし。(華嚴)

○うれしくも釋迦の御法にあふひ草 (承陽大師)

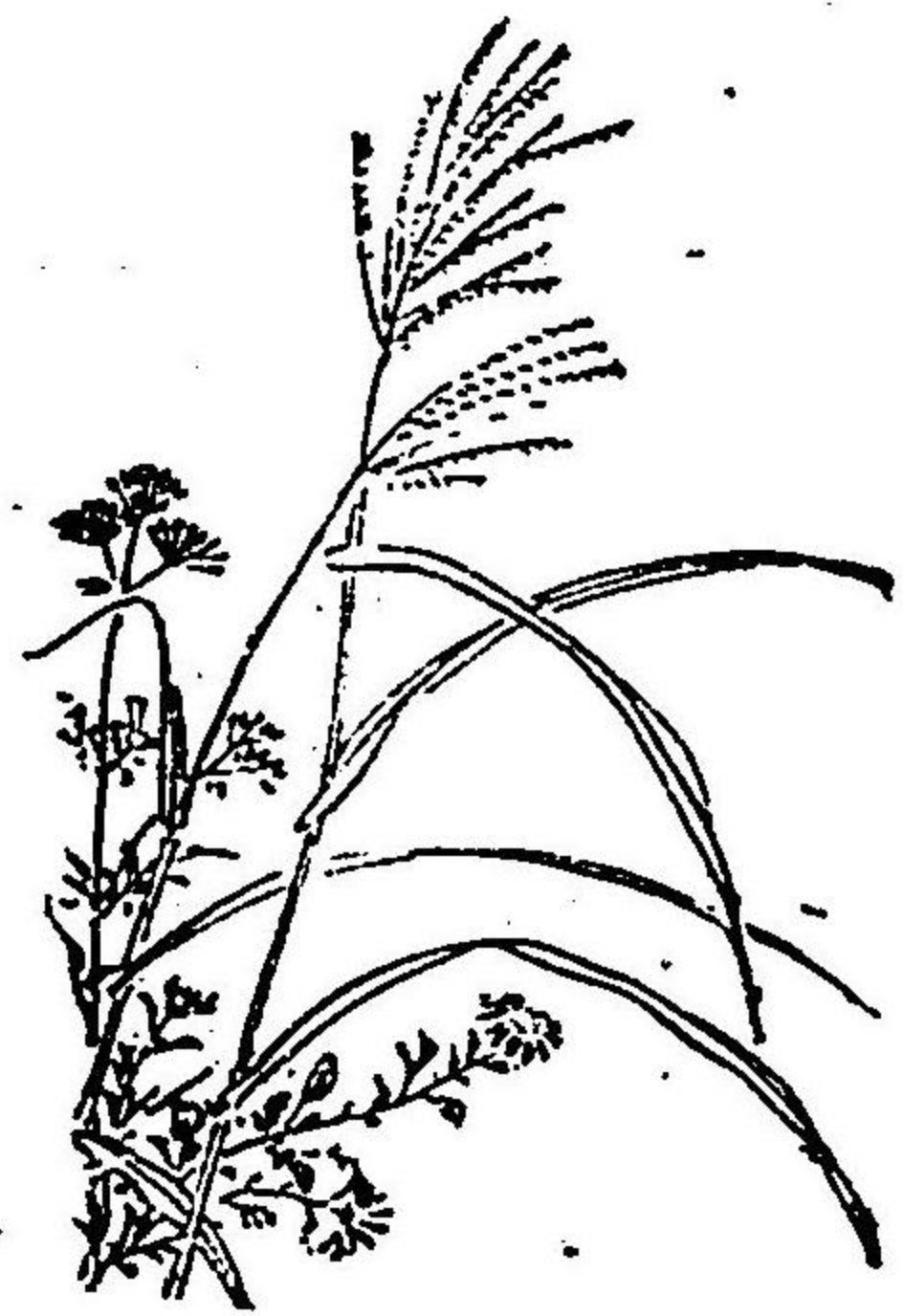
かけても外の道はふまめや

○御佛のひかりとおのが心まで (慈雲尊者)

○夜もすがらとなふる三世の御佛の
み名はむかしの吾名ならずや

むねのかゝみのくもりあらずな

(行誠上人)



第十四節

此歸依佛法僧の功德必ず感應道交するとき成就するなり、設ひ天上人間地獄鬼畜なりと雖も、感應道交すれば必ず歸依し奉るなり、已に歸依し奉るが如きは生々世々在々處處に増長し、必ず積功累徳して、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり。知るべし三歸の功德、夫れ最尊最上甚深不可思議なりといふことを、世尊已に證明しまし、衆生當に信受すべし。

これは修證義第十四節の御文で、二段に分れて居ります。即ち此の歸依佛法僧の功德必ず感應道交するとき成就するなり、設ひ天上人間地獄鬼畜なりと雖も、感應道交すれば必ず歸依し奉るなりといふところまでの一段は、歸依する我々と歸依せらるゝ三寶との關係をいふので、兩方か感應道交せなければ其の功德が顯はれぬ

ぞとの御示し。それから已に歸依し奉るが如きはといふところより、衆生當に信受すべしまでは、歸依三寶の功德の尊いことを讃歎して、三歸の御教訓を結ばせられたのである。サテ此の歸依佛法僧の功德といふことを御話申すには、三寶に三種の功德ありと申して、即ち一體三寶、現前三寶、住持三寶の三種がある、それをザツトなりと申さねばならぬ。一體三寶といふは早く申せば、道理の上から云ふたので、釋迦牟尼如來が御出世なさらなくても、又何も御説きなさらなくても、十方三世に充彌つて居るところの佛法僧の道理である。現前三寶といふは、釋迦牟尼如來の出世の時のごとで、すなはち現在釋迦牟尼如來が佛で有るし、そのお説きなさる御經が皆法で、又それを拜聽して居られた迦葉阿難舍利弗目蓮などと云ふ御弟子が皆僧じや、然るに釋迦牟尼如來御入滅の後になれば、現前三寶を拜むことも聞くことも出来んに依つて佛の御姿は繪に畫たり

木に刻んだりしてそれを拜み、御説きなされた法は紙に書き附けたり版にしたり、折本や綴本を造つて置ねばならず、又其の法を弘める御僧方も迦葉阿難と云ふ様な神通自在は無いにもせよ、現に剃髮染衣して寺に住んで居らるゝのか是れが住持三寶じゃ、それゆゑ現前三寶を今拜むの今聴くのと云ふわけには参らんけれども、一體三寶と住持三寶とは今でも立派に揃ふて居る併かし現前三寶も畢竟は一體三寶と感應するの目的である、その一體三寶が釋迦牟尼如來出世以前も出世以後も常住不變て萬古不滅であるから、此の方で歸依すれば必ず其の功德が成就する、その功德は「感應道交するとき成就するなり」とある、感應道交といふは因縁會遇といふやうな意味で、『華嚴經』に「菩薩清涼の月畢竟空に遊ぶ衆生心水淨ければ菩提の影中に現すとある、是れが感應道交の様子じゃ、水も上に昇らず月も下に降らねども、一輪の月が普く多くの

水に映るやうなもので、衆生が淨心を専らにして合掌低頭して口に南無依歸佛南無歸依法南無歸依僧と唱ふるとき、歸依する衆生の我々と、歸依せらるゝ三寶とが一つになつて、月と水とが上下に分かれて居て二つであるけれども、月が水に映つて一つになつて仕舞ふやうなもの、これは我々御互も本來自分に一體三寶の性徳を具有して佛の慈悲も解脱の功德も和合の妙用も皆生れながら持つて居るのを打ち忘れて感應せんから、あさましい凡夫の境界に沈み込んで我れと我がて、苦しんで居るのであるが、今佛祖正傳の儀式によつて、心口意の三業が打ち揃ふて一體三寶と一致契合して、三寶と自分とが一つともいはず二ともいはれぬ様になる、この時が感應道交で歸依三寶の功德が始めて成就する、それがとりも直さず成佛得道である、併かしこの感應道交といふとは甚深微妙な道理で、チヨット合點がゆきかぬるであらふが、何事も感應

道交せねば其の功德妙味といふものは顯はれぬ。月の光を見花の色を見鳥の囀るを聞き虫の吟ずるを聞くも此方の心に於て何氣なしに居てはサツバリその興味が無いが、ア、よい月である、ア、うつくしい花であると思ふと、此方の心と月なり花なりと互に感應する、ソコテ月花の妙味が出て来る。今一體三寶は古今に涉つて少しも變はらず天地に充ち塞つて居るけれども、此方に於て眞實の歸依が起らぬゆゑに、其の功德成就しないのである。それじゃに依つて、佛祖正傳の作法によつて、南無歸依佛と唱ふる、これが感應道交を得る始めじゃ。この作法によつて眞實淨心に歸依し奉るときは必ず感應道交して三歸の功德が成就する。サテこの歸依三寶は決して人間ばかり出来るてはないから、設ひ天上人間地獄鬼畜なりと雖も感應道交すれば必ず歸依し奉るなりと仰せられてある。貪欲の深い餓鬼、瞋恚の強い修羅、愚痴の甚しい畜生、これらの

煩惱の深い爲めに言ふにいはれぬ苦を受け、地獄などの衆生は、業報が深いので、人間並の者よりは迷が深いから、中々容易に感應することが出来難い。その業報の深い迷の強い地獄餓鬼畜生修羅でも、フトしたとより因縁會遇で感應道交すれば三歸の功德が成就する。してみれば折角萬物の靈長たる人間に生れた所詮には、速かに一體三寶の性徳に感應するが宜い。ソコテ已に一たび佛法僧に歸依し奉つた上からは、今生ばかりでなく未來永劫までも、その功德が積り累つて、キツト阿耨多羅三藐三菩提すなはち諸佛如来無上の大道を成就すると仰せらる。すべて天地間にあるものは何でも増長する性質を具へて居るもので、初めに一粒の米でも一旦これを地上に蒔いて、雨露や日光が當つて秋になつて一莖の稻が實る、それから又之を蒔くといふやうになると次第に増長して、遂には何石といふ澤山な米が出来る。善業悪業も丁度そのや

うなもので、一生二生三生と次第に增長するものであるから、今三寶に歸依して感應道交した功德も生々々々生々々々を換え身を代えても在々處處々何れの處でも增長して遂に阿耨多羅三藐三菩提を成就する阿耨多羅三藐三菩提といふは天竺の詞で阿耨多羅は無上と申すこととて、此の上もないといふこと、三藐三菩提と云ふは正偏知と申すこととて、正しくして曲らず、普くして行渉る智慧といふこととて、すなはち佛の悟りと申すこととてある。すてに一たび三寶に歸依した上からは、その功德が次第に增長して遂に諸佛如來の悟を得ることが出来るぞよと、釋迦牟尼世尊が已に御證明なし置かれれば、御互衆生は決して疑念をさしはさまずに信受奉行すべしとの仰せである。サテ此の一節では感應道交といふことが最も肝要であるが、萬物の靈長たる人間すら容易に感應道交は出來難いに、地獄じや餓鬼じや畜生じやといふ、業報の深い迷の強いものが、

どうして感應道交しやうぞといふ疑を起す向もあらうがこれは丁度學校は年中仁義忠孝の道を教へて居る處であるから、學校に居る者は皆く仁義忠孝を行ふ等行ふ志の起るべき筈ではあるけれども、實際は中々そうはゆかぬ、學校に居る中は却つて親不孝をじたり不義不仁のことばかりをして居たものが、その惡業の結果で監獄に入り種々様々の苦役を受け、つらい難儀な目に遇ふところより忽ち本心に立ちかへり親孝行の志を起すものがあるやうなものである。畜生のやうなものでも却つて人間よりも勝つた行をするには往々新聞雜誌などに出で居るものを見ても分る。支那の釋の法聰禪師といふは、八歳にて出家せられたが、形容麗しくして玉の如しとあつて實に立派な姿であつた。その法聰禪師が東の方嵩山に遊び、西の方武富山を涉り、襄陽といふところの傘蓋山といふ山の白馬泉といふに方丈を築いて、そこに住つて居られ

た。スルト梁の晋安王といふが襄雍を都にして居られてから、その法聰の風儀を聞いて、そのやうな高僧ならば一度逢ひたいものじやと思はれて、その法聰の禪室に赴かんとて山に入り込まれた。しかるに谷の間に猛火が一面に見えたから、さて不思議と思ふ中に、忽ちその火は消えて大水となり、あたりを湛々としてあつたが暫くすると又忽ちなくなつて、このたびは法聰の方丈が見えた。これは丁度この時法聰が水火定に入られた時であつたからだといふ。サテ晋安王は堂内に入つて見られると、法聰の兩側に二匹の虎が隣つて居るから、大いに驚いて後へ少しく退いた。そうすると法聰が手を以て虎の頭を按して地に着ければ、虎は兩眼を閉ぢて眠つた。ソコテ晋安王は安心して悠々と法聰を禮拜して還つた。又ある時十七匹の大虎が一緒にやつて来たから、法聰はその虎に三歸戒を授けて、誡めて云はるゝには、虎よ其の方等は決して民百姓を犯

し害すやうなことをするなよと、斯様に誡められて又弟子の僧に申し付けて、布の切れを裂いて其の虎の頸にくゝりつけさせて、これを信として置くから今から七日経た後に再び来れと云ふて放された。そうすると丁度七日目に晋安王が再び參詣せられたが、果して十七匹の虎が皆布の切れをかけたなりで来たから、食物を與へその布切を解いて去らせた。それからといふものは、其の郡に虎の害がスツカリ無くなつたといふ。ソコテ晋安王も益す法聰禪師の高徳に感服して、その事を天子に奏問致されたに依て、天子より勅を下して禪居寺といふを造られ、又方丈の傍に靈泉寺といふを建てられたが、後隋の時に景空寺と改めたといふ。又白鹿や白雀も来て栖んで居たといふことである。この法聰禪師は梁の大定五年九月に九十二で遷化せられたと、續高僧傳に出て居る。これらは宿福善根の力によつて因縁會遇して三歸の功德が成就したと申

すものじや、かやふな事は支那ばかりではない、日本にも澤山あること、彼の屍殿司が涅槃像を畫かれる時に、一匹の猫が毎日、側に来て見て居るので、屍殿司が汝も此に畫いて貰いたのか、そうなれば畫いてやらうが、繪具が二品足りないから、それを汝が探し來たならば畫いてやらふと云はれると、そのまゝ彼の猫は其所を立ち去つて、二三日ほど経つてから口に土の塊を含んで來たから、屍殿司がそれを取つて見られると、即ち丁度入用なる繪具にすべき品であつたから、屍殿司も大いに感ぜられて、それを用て猫の姿を畫かれた、畫か出來上ると直ちに彼の猫は何所へか去つて仕舞つたと云ふ、かやうな因縁で東福寺の涅槃像には猫が居ると云ひ傳へてある。犬や猿などが主人の恩を知つて之を報えたなどの事より推しても、因縁會遇の時は畜類でも三歸の成就せぬことはないといふことは分る。まして釋迦牟尼如來が已に御保證あ

つてキツト成就するぞよと仰せられてあつて見れば、我々御互は最早少しも疑ふべきはないほどに、朝な夕なに身口意の三業に誠を凝らして、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧と唱ひ、いそいで感應道交の功德成就を期すべきである。サテその上の發願利生で自分ばかりでなく、その功德を一切衆生に廻らして、行持報恩が何よりの肝要である。

○参考

○若し三千大千世界の中に滿てる如來の數、稻麻竹葦の如くならんに、茲に人あり此の諸の如來を悉く供養し奉りて、滿二十歳の間、飲食衣服、臥具醫藥四事の奉納怠らず、尚ほ其諸佛の滅後に於て各々七寶の塔を起し、復た香華種種々の供養を以てせんに、其福德實に多し、然れども人あり、淳淨心を以て佛法僧の三寶に歸依し奉りて得る所の功德

に比すれば百分の一にも及ばず(希有校量)
○是の三歸依は乃ち是れ一切無量の善法乃至阿耨多羅三藐三菩提の根本なり(優婆塞)

○清くすむ心の底をかゝみにて (俊秀法師)

○まことある心にさけば入相の やがてぞうつる色もすがたも

○まことある心にさけば入相の (行誠上人)

鐘の音にもあどろかれぬる



第十五節

次には應に三聚淨戒を受け奉るべし。第一攝律儀戒、第二攝善法戒、第三攝衆生戒なり。次には應に十重禁戒を受け奉るべし。第一不殺生戒、第二不偷盜戒、第三不邪淫戒、第四不妄語戒、第五不酤酒戒、第六不說過戒、第七不讚毀他戒、第八不慳法財戒、第九不瞋恚戒、第十不謗三寶戒なり。上來三歸三聚淨戒十重禁戒是れ諸佛の受持したまふ所なり。

さて此の初めの三聚淨戒といふは、この中に一切の佛法の功德法門が皆籠つて居るのでありまして、第一の攝律儀戒と申すは、一切の戒律法規儀式等が残らず此の一戒の中に籠つてあるすなはち出世間の上ばかりでなく、凡そ世間萬般の上で悪いといふ事は決して爲まいぞといふのが此の戒法でありまして、この次の十重禁

戒といふものも全く此の攝律儀戒の中てあります。第二の攝善法戒といふは、攝律儀戒の反であつて、是れも只出世間の上ばかりでなく、四諦十二因縁、六波羅密や、念佛、稱名、題目は申すに及ばず、世間の上に仁義忠孝、慈善公益の事業など、かりそめにも世の爲め人の爲めになる善いと云ふ事はみな此の中に籠つて居る。さてかやうに悪いといふ一切の悪い事をやめ、善いといふ一切の善い事を爲るも畢竟何の爲めぞといふに、只自分ばかりの爲めではなく、どうかして一切衆生を濟度して、共に佛果菩提を得やうといふが根本であるから、第三に攝衆生戒がある。この攝衆生戒は饒益有情戒とも、利益衆生戒とも申しまして、一切生けとし生けるものに安樂を與へてやりたいといふ誓願を立てるのであります。ソコで修證義の上からいふと、四大原則なる懺悔滅罪は受戒の前方便であるから、第一の攝律儀戒は受戒入位に當り、第二の攝善法戒は行持報

恩で、第三の攝衆生戒は發願利生に當るので、三聚淨戒と修證義の四大原則とは全く別なものでありませんが、兎に角この三聚淨戒は一切戒法の根源であつて、この次の十重禁戒等もみな此れから割り出したものでありますから、一番最初に之れを受けるのであります。サテ次の十重禁戒と申すは、『梵網菩薩戒經』に御説きなされてあるので、重い戒法が十ヶ條、それが即ちこの十重禁戒で、この外に軽い戒法が四十八ヶ條合せて五十八戒あります。先づ重い戒法が大切にありまします。よつて此の十重禁戒を受けることになつて居ります。又十善戒と申すのもありまして、此の十重禁戒と大低似て居ります。この方は身三口四意三と申して、身で造くる罪が三つ、口で造くる罪が四つ、意で造くる罪が三つてあります。この十重禁戒では身が四つ、口も四つ、意が二つといふことになつて居ります。ソコで十重禁戒は第一は不殺生戒といふのである。この不

殺生戒といふは大慈悲の心を以て物に對し凡そ生けとし生ける物の命を取るなといふ戒である。身をつみて人の痛さを思ひ知れたれもいのちはをしきものなりと詠れたは東流和尚の歌であるが、現に自分が何より大切なものは命でありませう。しかるに自分が大切とおもふ命をとられては惜しいといふことが分つてみれば、人の命はとられるわけてはありませぬ。「大智度論」の中にも殺生に十罪あるといふことが説いてありまして、世の中に悪いといふことも澤山ある中に、殺生ほど悪いことはありませぬから、之を犯した罪が一番重いとしてあります。よつて是の戒法が眞最初に置いてあるのであります。第二は不偷盜戒。これは自分の物と定らぬ物を決して自分の自由にするなといふ戒である。一切の財物は生命を繋ぐべき大切なものである、しかるに之を盗むはとりもなほさず、生命を害すると同じことになるので、その盗まれた者の心

のくるしみはいかばかりぞや、しらなみの見る目なきさに浮草のひと葉なりともとりなかくしぞといふ歌もありまして、たとひ紙半枚糸一筋たりとも取り掠めるはよろしくない。すべて人の愛するものを奪ふは他に苦しみを與ふるのであるから、爲まじきぞとの戒である。第三は不邪淫戒。これは夫婦とさだまらぬ男女の交をせぬといふ誓じや、第四は不妄語戒。これは虚言偽言をいふまいぞと申すことである。見たことを見ぬといひ、聞かぬことを聞いたといふが如く、すべて丸るのうそのみでなく、言ふべからざることを言ふたり、又はよいほどのことを言ふて人を欺き誑ますのは皆妄語である。これまでの四つは性戒と申して天然の戒法であるから、誰れもこの戒法を犯して氣持のよいといふものは一人もない。そこで何れの國の法律でも宗教でも、此れは犯してもよいと許してはないが、とりわけて佛法にては只形のうへばかりでなく、心の内

から犯す念が起らぬやうに致さねばならぬといふ誠めてある。第五は不酷酒戒。これは酒を賣つてはならぬといふ戒である。酒を賣ることはならぬとあるからには、造ることや飲むことのならぬといふことは申すまでもない。酒に三十六の過失ありと申して、酒の害といふものは實に恐しいものであるから、これは決して飲んでほならぬが、飲みたいと思ふ者があつても、酒が目前になければ辛抱もしよいが、之を賣る者があつて何時でも買はれるといふと、直に之を買ふて飲みたくなる。ソコ酒を賣るのは人に過失を勧めるのであるから、決して爲さぬことぞと御戒になつて居るが、殺生、偷盜、邪嬖と、この酷酒は身より起るから、之を身業といふ。第六は不説過戒。これは前の不妄語戒の中より分れ出したものであるが、説過は妄語より少く違ふところは、この方は意業と申して、只口でいふばかりでなく、心の方の業にかゝる所がある。不説過といふは人

の悪い事を言い觸らすなど申すことである。他の過失を云ひ觸らせば、其の人の名を傷けるばかりで、自分の益になるわけではない。それのみでなく、少しく心ある者は悪く言はれた人よりは、言ふた人の心よくないことを見ぬいて賤しめるものであるから、決して之を犯してはならぬとの戒である。第七は不自讃毀他戒。これも矢張口業である。前のは只人の過失を言ひ觸らすであるが、この方は自分の事を自分で讃めて、その引合に他人の悪口を言ふのである。前の妄語と説過と、自讃毀他はいづれも口の上より起るから、之を口業と云ふ。第八は不慳法財戒。慳はヲシムと訓む字で、出家は法施を慳まず在家は財施を慳むなどの意で、ツマリ貪欲を御戒めになのである。自分の知つて居る事、又は自分で出来る事は、なんでも惜まずに人に施してやれといふこととてあり、第九は不瞋恚戒。自分の氣に入つたとは何れによらず、之を食ひ取つて人に施さず、自

分の氣に入らぬ事は何に限らず之れに對して腹を立てるといふのが凡夫の有様であるがこの腹立を怒るを瞋恚といふのじや佛法の道理をスツカリと合點して天地萬物の真相眞理が分つてみれば萬事につけて一つも怒り腹立てることは無い筈であるけれども多くのものが容易に此の境界に至ることが出来難いに因つて箇様に御戒めになつて居るじや第十は不謗三寶戒これは佛法僧の三寶を謗りまいぞとの御戒であるイヤ謗るところでなく既に三寶に歸依した上からは謗りたうても謗られぬ道理であるサテ戒法を持つ上に就いて小乗と大乘とは大に趣が違ふところがあるソレは外てはない小乗戒では身の罪は身だけのこと口の罪は口だけのことに限りませんが大乘戒では心地法門と申して一切の事を心の上から論じますから身の罪も口の罪も皆互ひに關係して居る例へば小乗で殺生と申せば生き物の命を取るのを犯戒とい

ふことになりませんが大乘ではたとひ實際に物の命を取らずとも心の中で殺りたいと思ふたり又は口で殺すと云ふたばかりでも直に殺生戒を犯したといふことになる偷盜もその通で他人の物を實際に偷み取らずとも心で偷みとりたうと思ひ又は口で偷み取るといへば直に偷盜戒を犯すことになるこの不謗三寶戒も謗といへば口業の様に見えるけれども其の實は心の信仰が肝要であるその信仰といふは「梵網經」の中に汝は是れ當成の佛なり我は是れ已成の佛なり是の如きの信を爲せば戒品已に具足すと仰せられてあるこの御詞を確と信仰して我々は最早凡夫でないキツト佛になれる身分であると合點して毫も疑はぬじやこの信仰さへ確と決定すればこの一念の中に三聚淨戒も十重禁戒も四十八輕戒も皆悉く具つて居るぞとの御示じやソレテこの信念が一たび確と定まつた上は十重禁戒を殘らず持たねばならぬといふこ

とはないやうになる。たとひ受けるには十重禁戒を一時に悉く受けても、之を持つには一戒でも二戒でも分けて持つことが出来る。イヤ實際に悉く持つことの出来難い場合がある例へば濱邊に居る漁夫とか、山中の獵夫の如き者は、不殺生戒を持つことはなり難い、その代りに偷盜はせず、妄語は云はぬといふことは出来る。又酒屋商賣であつてみれば、不酤酒戒は守れんにしても不邪淫戒は持たれるといふやうな工合であるから、十戒の中一戒や二戒は除いても、その代りに外の戒法はなるだけ持つことにすれば、自然にその中に十戒の功德が具る。サテ以上の三歸戒、三聚淨戒、十重禁戒を合して十六條戒といふが、この十六ヶ條は、三世の諸佛の齊しく受持なされた戒法であつてみれば、既に諸佛の仲間入をした御互は必ずこの通りに受持すべきである。昔し天竺に或る菩薩が托鉢をして、玉屋の店に立たれると、其の店の主人は幾程かの御布施を

上げやうと思ふて、今磨きかけて居た玉を其の儘そこに置いて奥に遁入つた。スルト其の家に飼ふて居たところの一羽の鵝鳥が、其の玉の色が赤くて美しいものであるから、何かの肉とても思ふたか、飛び上つて一口に呑んでしまつた。そのところへ玉屋の主人が出て来て、その菩薩に御布施を上げやうとすると、大切の玉がない。さては此の僧、賊に殊勝らしくて居るけれども、盜賊であるかと思ひまして、サ一坊さん此處に在つた玉を何處にやつたか言へ言へば許してやらふが、言はなければ許さぬと、大變に立腹して申します。には、今この店頭に住つたのはお前だけであるから、御前が知らぬ筈はないと、怒に乗じて、菩薩の頭を打擲いたしました。その打ちかたが餘り強かつたものと見えまして、血が流れ出た。スルト彼の鵝鳥はこれはよい食物じゃとても思ふたか、其の流れ出た血を嘗めはじめた。彼の主人は之を見て益すく、腹を立て、盜賊の血を

嘗めるといふことがあるものかと云つて其の鵝鳥を打ち擲りま
したところが打ち所が悪かつたかして、鵝鳥はそのまゝコロリ
と死んでしまつた。菩薩は之を見てホロ／＼と涙を流し、わしが斯
様に打擲せられるも耐えてをつたのは、此の鵝鳥が可愛さうであ
つたからである。實は前が奥の間へ行つた中に、その玉を此の鳥
が呑んでしまつたのであるが、わしがそういふたならば、此の鳥が
殺されるであらふと思ふて黙つてをつたが、今此の鳥が殺されて
みれば折角辛抱したことも無益になつたと仰せられた。之を聞いて
て主人は早速死んだ鳥の腹を割いて見ると、果して玉がそのまゝ
あつたから、大いに菩薩にその無禮を謝して、其の徳に感じたと申
すことが、御經の中に出てをります。すべて戒法は其の持つ人の心
か肝要であります。この菩薩のやうな心がけてあつて見れば、決
して殺生などの出来るわけのものでありませぬ。そして殺生ばかり

りてはありませぬ。偷盜でも邪淫でも妄語でも、かりそめにも此の
心を持つて居る以上は、決して犯すといふことは出来るものであ
りませぬ。この心一つで以上の十六條戒は悉く守れてゆきますか
ら、吳々もこの心がけを失はず、朝な夕なのつとめをなさるのがと
りもなほさず諸佛の行であるから、盡未來際までも御相續あるが
何よりの肝要。

○参考

○錢財を捨て、功德を造くると雖も、戒を持して貪瞋を断つに如かず。
(證者)

○戒は萬行の先鋒、六度の基趾たり、屋宅を造くるに、先づ其の基を固う
するが如し、若し基趾無くんば、徒らに虚空に架せんのみ。(一行證)
○戒は一切善の所住處なり、譬へば百穀藥本の地に依りて生ずるが如

し持戒清淨にして能く諸深禪定實相の智慧を生ず亦是れ出家人の初門なり(大)

○若し人能く淨戒を持てば是れ則ち能く善法あり若し淨戒なくんば諸善の功德皆生ずることを得ず是を以て當に知るべし戒を第一安穩功德の所住處となすことを(佛經)

○汝等比丘我が滅後に於て當に波羅提木叉(戒ふ)を尊重し珍敬すべし。闇に明に遇ひ貧人の寶を得るが如し當に知るべし此れ則ち是れ汝等が大師なり若し我れ世に住するとも此に異なることなげん(上全)

○うき事のなほもわが身にもつれがし
すてし心のまことをや見ん

(大燈國師)

第十六節

受戒するが如きは三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を證するなり誰れの智人か欣求せざらん世尊明らかに一切衆生の爲めに示します衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る位大覺に同ふし已る眞に是れ諸佛の子なりと。

これは修證義第十六節の御文でありましてこれまで申し述べました三歸戒三聚淨戒十重禁戒を合せて十六條戒と申すのでありますがこの十六條の戒法を受けたる身の上はその身その儘佛様の中間入をしたのであるぞとの思召て受戒するが如きは三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を證するなりと仰せらる阿耨多羅三藐三菩提は前にあつた通り梵語であつて支那の詞に譯すれば無上正等正徧知といふこととてツマリ佛

道と申すことである。金剛不壞とは、佛果を讚めたる詞であるが、金剛は天帝釋の持つて居るところの寶の名であつて、これは其の跡に至つて堅くして、如何なる者も之を壞すことが出来ぬが、其の用は又至つて利くして、如何なる物をも能く之を壞すといふ處から、佛果を讚歎して、金剛不壞と申したのである。前の十四節の處では、已に歸依し奉るが如きは、生々世々在々處々に増長し、必ず積功累徳して、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなりとあつて、未來でなければ佛にはなれぬやうに成つて居りましたが、これは佛法僧に歸依する時のことであるけれども、今此處では、愈十六條戒を受けて、本來具有の戒徳を發得したのであるから、この戒徳のあらはれた上は、最早三世の諸佛が御證りなされたる所の阿耨菩提金剛不壞の佛果を證ることが出来るのである。してみれば、貪欲瞋恚愚痴等の三毒に覆はれて邪見に陥つて居る所の輩は、致方なけれども、かりそ

めにも智慧あつて、是非善惡を辨別する者は何人と雖も此の戒法を受くことを欣はぬものがあらうぞとの思召て、誰の智人か欣求せざらんと仰せられた。この受戒したる身の上が直ぐにその儘無上の佛果を證られる境界ぞといふは、只高祖大師の御一己の思召てはないといふので、更に世尊明らかに一切衆生の爲めに示しましたと、『梵網經』の偈を引いて、盧舍那佛の御詞を證據に擧げて、衆生佛戒を受くれば、即ち諸佛の位に入る位大覺に同ふし已る、眞に是れ諸佛の子なりと、かやうに仰せられてある。この位に入るといふ詞が、受戒入位と云ふことの據所であつて、吾々が佛祖正傳の三歸三聚十重禁戒を受けられた時は、この身この儘直に三世諸佛の御仲間入が出来たと申す意味じや、位大覺に同ふし已るとある大覺といふは、大いに覺るといふことで、一體三寶の中の佛の徳で、法身の如來のことである。妄想煩惱の塵垢に埋もれ、三毒五欲の勞苦

に追はれて居ると思ふた凡夫が、その儘清淨法身の如來と同じ位である。と合點の出來た時、これを本證が顯はれたと申すのじや、しかし釋迦牟尼世尊の様に三祇百劫の修行を積み、八相成道の濟んだ御方に比べてみれば、子に相違ないから、そこで眞に是れ諸佛の御子なりとある。既に諸佛の子であつてみれば、最早從前の迷妄の凡夫ではない、これを譬へて云へば、天子様の御子は生れながら一、天萬乘の君主たるべき資格が具はつて居る。又獅子は百獸の王といふから、生れたばかりの子でも、一聲吼るときは虎狼のやうな猛獸でも、その聲を聞けば皆戰慄して恐れるといふ。丁度今吾々もその通で、生れたばかりの諸佛の子ではあるけれども、已に三界の大導師一切衆生の慈父たる資格があるからして、ズット氣象を高く持たねばならぬ。しかるに此の氣象を持つことが出來にくいものかして、動すれば凡夫根性が脱けかねてならぬ。高祖大師は「學道用

心集」にも先づ須らく佛道を信ずべし、佛道を信ずる者は須らく自己本道中に在つて、迷惑せず、妄想せず、顛倒せず、増減せず、誤認なしといふことを信ずべしと仰せられてあつて、此の信念を持つことが一番肝要である。或は吾々凡夫が授戒を受けただかりて、三界の大導師である、一切衆生の慈父である、と云つたところで、どうして一切衆生を濟度することが出來やうぞ、どうして三界六道を教化することがなるものぞと思ふ向もあらうが、決してそうでない。一たび三世諸佛の御仲間入をいたして、此の身は從前の凡夫でない、既に諸佛の子であるといふ心になつた上は、男女老若に拘らず、貴賤貧富を問はず、商人であらうが、農夫であらうが、爲る事なす事が皆佛事であるから、耕作をし、商賣をする上、絲をとり、機を織る上、が直に衆生濟度の務めとなる。なにも袈裟衣を着けて、御經を讀んだり、説法をするばかりが、衆生教化ではない。朝から晩まで行住坐臥

手舞ひ足踏む上に、この威念即ち吾々は最早佛子である、衆生濟度の身であるといふ信念があれば、語黙動靜が自然に佛事となるから、それが三界教化となり、衆生濟度となる、その功德は實に廣大無邊である、昔し天竺に鶻喇摩羅といふは、その性質至つて悪い人であつて、常に生き物を屠り殺すを業といたして居たから、その罪業も中々深くあつた、しかるに不思議なことには、ある日釋迦牟尼如来の御化導に預り、忽ち悟りを開いて、持つて居た屠刀を抛げ捨てながら、「我も亦千佛の一數なり」と云はれたと申す事じや、我も亦千佛の一數といふは、今までこそは知らず、にあらゆる悪しき事をもなしたれ、かく難有御教化を受けて、その教化のまゝに行ふ上は、縦ひ身はどのやうに卑からうが、その職業が賤しからうが、その身分その職業に拘らず、この身このまゝ、直に三世諸佛の一人であるぞと、シカト合點がゆきたと申すこと、サーしてみれば誰れても

諸佛の仲間入の出來ないものはない、殺生ほど悪いことはないが、その殺生を業といたして居たる、極惡重人の鶻喇摩羅でさへも、世尊の一語を聞いて、我も諸佛の一人であると合點することが出來るとすれば、各々方にこの合點のゆかぬ道理はないほどに、高祖大師の御言葉を露聊も疑はず、これまでの凡夫下劣の根性をふりすて、ズット高尚の氣を持つて朝な夕な、行が、一諸佛の御振舞にかなうやうに御心掛になつて、さて報恩の勤めが何よりの肝要

○参考

○一智の箭を駕して、衆魔の軍を破り、一慧の刀を揮ふて、群疑の網を斬る。(宗鏡)
○實智慧の者は即ち是れ老病死海を渡る堅牢の船なり、亦是れ無明黒闇の大明燈なり、一切病者の良藥なり、煩惱の樹を伐の利斧なり。(佛遺)

○智慧ある者は、佛法の中に於て心定りて動せざることを、猶ほ石山の風の動ずる能はざるがごとし、(成實)
○但凡情を除け、別に聖解なし、(古徳)
○無信は無手の如し、手なき人は寶山中に入れども、則ち取る所ある能はず、乃至若し信なくんば、この人我が法海中に入る能はず、枯樹の華實を生ぜざるが如し、(大論)

○さめぬればありとも見えず、手枕の

(行誡上人)

夢のかよひ路なれたどるらん

○押しなべてさとりの花の種と聞けば

(行誡上人)

うれしきものは心なりけり

○心から邪にふる雨あらむ

(日蓮上人)

風こそ夜の窓をうつらめ

第十七節

諸佛の常に此中に住持たる、各々の方面に知覺を遺さず、群生の長へに此中に使用する、各々の知覺に方面露はれず、此時十方世界の土地草木牆壁瓦礫皆佛事を作すを以て、其起す所の風水の利益に預る輩、皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて、親き悟を顯はす、是を無爲の功德とす、是を無作の功德とす、是れ發菩提心なり。

只今讀み上げたのは、修證義の第十七節でありまして、前節の文意を承けて、受戒の功德の廣大なることを御示しになつたのである。佛祖正傳の菩薩戒は、自性清淨戒と申して、御互に本來具有したものを發得するまでのことであるから、決して外より物を受け取るといふわけではない、即ち遣り取りに涉らないのであるから、已に受戒して佛子となり、佛の位に上つた以上は、三世の諸佛と平等不

二となる筈である。ソコテ今此では衆生と佛と同一の作用をなし、同一の功德をあらはすことを御示し下さる。諸佛の常に此中に住持たる各々の方面に知覺を遺さず、群生の長へに此中に使用する、各々の知覺に方面露れずとある。此中といふは即ち戒法の中といふ意、住持といふは持主といふこととて、諸佛は常に此戒法を持ちなされてあるから、住持といふ使用といふは衆生も常にこの戒法を自由に使ふてゆくから長へに使用する」とある。方面といふは凡そ形に顯はた眼耳鼻口などに觸れる謂はゆる萬物のこと、知覺といふは、凡そ生とし生ける者の心のことである。さて此の文句は兩方互に一緒にして見なければならぬやうになつて居る。決して諸佛はこの戒法の持主であつて、衆生は使者であると別々に見るのではない。已に持主であるからは之を使ふは固より定つたことであり、又之を使ふ上は矢張その持主である譯である。ソコテ三世の諸

佛も、一切の衆生も、此常住佛性の戒法の持主たる資格を以て、日夜々自由に使ふてゆく上は、天地の間にある萬物の外に、各自銘々の心といふ者も遺らず、又御互各々の心の外に別々の萬物と云ふ者の露れやうはない。つまり萬物と自己と一つになつて、萬物の外に自己なく、自己の外に萬物なく、諸佛も無ければ衆生も無く、迷もなければ悟もない、コウなつて來れば其の作用も功德も實に廣大無邊であるから、此時十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆佛事を作すを以て、其起す所の風水の利益に預る輩皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親ささとりを顯はすと仰せらる。已に佛もなく衆生もなく迷も悟もない道理が顯はれてみれば、十方法界に有りとあらゆる人間は申すに及ばず、犬猫の様な畜生から昆虫草木家藏屏牆さては瓦も石も皆悉く其の儘に眞實の體性と顯れて、各その本分を全ふするやうになるから、其中から起る風にあたり、その中

を流るゝ水に觸れる者も、皆甚深微妙思ひ測ることのできぬ眞理に感化せられて、各自親しき悟があらはれる。丁度一家の主が心に掛かよくて、能く家業を働けば、身代も裕になつて、家内和合し、家藏も立派になり、庭園の手入も行届いて、泉水も清く流れて、その中に住む鯉や鮒も、なんとなく悠々として泳ぎ、雀鴉の聲までもドコトなく、楽しく聞へるやうなものであつて、しかも是れがドウシテかやうになるかと云ふに、無爲無作である。爲も作もナスと讀む字で、皆人手に懸ることであるが、今此甚深微妙不可思議の有様は、本より人手に懸るのではなく、知らず／＼天然自然にその本性本徳があらはれるのであるから、是を無爲の功徳とす、無作の功徳とす、と仰せらる。ナント廣大無邊なものではないか。サテ個様に仰せられた處は、實に佛法の究竟の目的を達した有様で、佛法のゆきつまりで、これより外は何も仕ることはないと思はれますが、中々そう

でない。此の外に何の仕ることもないやうに思ふ處に、佛法が外々の教と違ふた處がある。之を却來と云ひ、又は百尺竿頭一步を進むとも云ふて、外々の教では極處に至つて仕舞へばそれでよいとしてあるが、佛法では此の極處に至つてから、本へ戻つて来て初めて其の働をするといふ。この本へ戻つて来て働かうといふ心、起すを是れ發菩提心なりと仰せらるゝ。菩提心を發すといへば、佛法に初めて入る時の心と云ふやうに聞えて、怪しいやうなけれども、そうではない。學校を卒業して仕舞ふたらば、もうよいといふて、其の學問を捨て、はならぬ。學校を卒業したらば、イヤ、是れからは其の學問を以て實地に施し、人を導き、世を益しやうといふ心にならねばならぬ。丁度それと同様であつて、自分が佛戒を受けて、諸佛の位に入つた上は、朝な夕なの仕事が佛の仕事となつて、一切衆生を救うてやらふといふ大慈大悲の誓を立てるのである。一たび此の

心を發すときは、其の功德は實に恐しいものである、これを證上の修といひ、又は、妙修ともいふ、この妙修をつとめる上の初發心を發菩提心といふのぢや、昔し京都に聖學法印といふは學問も博くしてその上に辯舌のよいところよりして、諸方へ講義法談に請せられて往かれてあつた、一日或る處の招待に澤山の布施物を貰つて、夜中になつて歸らるゝ途中に、河原に通りかゝられると、數多の盜賊が待ち受けて居つて、聖學法印の輿の前にツ立ち、その中の魁と思はしい男が矢をつがねてさしつけ、是れ出家、その貰つた布施物残らず此處に置いてゆけ、若しくづゝ云ふと命がないぞと、嚇しつけた、スルト法印は直にそこに投出して、思はるゝに、信心の施主が三寶に供養せうとの志を以て捧げし此の施物、これを以て佛事に用ひ、又他の利益あるに事に用ゐると思ふに、此賊共はよこしまにも掠め取ると、同じ盜みとは云ひながら、殊に罪業重くして、惡

道に墮ちんは必定なるべし、サテ、不憫なる者どもよと、自分が難に遇ふたことは打ち忘れ、心を澄して聲高く、何ぞ電光朝露の暫時の此の身の爲めに阿僧祇耶長時の苦因を造くらんと三遍打ち返して云はれたところが、如何にも氣高かく貴いやうに思はれて、彼の盜賊は身の毛もよだつて、つがねた矢をはづし、これほどの難に遇ひながら、何事をかやうに御心を澄まして唱ひなさるゝや、これに抑々、なんといふ御心であるかと尋ねたら、法印は固より能辯の僧であるから、生死無常の道理より説き立て、人間一生は夢幻の如く、電光朝露のやうなもの、因果の道理は遁れ難く、苦樂の報は必ず受ける、しかるに三寶の物をかすめ取つて妻子を養ひ、身命をつながんとするは、凡夫の習とは云ひながら、サテ、淺間敷ことである、罪によらずして世を渡る業も多かるべきに、斯る大罪を作れば、地獄に墮ちて無量劫の苦を受けるのは、必定なれば、その不憫

さに我が身の事は忘れて、かやうに云ふたのじやと泣くく云ひ聞かせられたから、彼の盜賊の魁も涙に袖を絞つて去つた。サテその次の日の夕方、月代ある入道聖學法印の處に来て、コソソリと申し入れるには、昨夜の強盜入道になつて参りました。昨夜の御説法に前非を悔い、發心致しました。乾兒の同じ惡徒共も殘らず入道になりまして、此通に警少々持參致しました。實は一同参るのであります。すが、それでは仰山らしう御座いますから、私一人て参りました。と云つて、昨夜取つた布施物を殘らず返して置いて歸つたといふことじや、なんと難有話ではありませぬか。聖學法印の如き人になれば、仕る事爲す事が皆悉く佛事であるから、かやうな恐しき盜賊迄も、一たび遇ふて前非を改めて善人となる。まして兎んや斯くまで惡い心のない者は、いかで其の利益に預らぬことがあらうぞ。天地萬物は皆吾が心の持ち様で善にもなれば惡にもなる。されば

高祖大師の此の時十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆佛事を作すを以て其の起す所の風水の利益に預る輩皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて、親き悟を顯はすとある御言葉、堅く信じて疑はず、朝夕佛戒相續の上に菩提の願行あるのが何よりの肝要。

○参考

○菩提の中に心不可得なり。心の中に菩提も亦不可得なり。菩提を離れて心不可得なり。心を離れて菩提不可得なり。乃至菩提有りて見て取證すべしと言は、當に知るべし。此の輩は即此れ增長慢の人なることを。若し能く是の如く信解するを乃ち眞に菩提心を發す者と爲す。

(廣積)

○設ひ未だ眞實の菩提心發らずといふとも、先きに菩提心を發せりし佛祖の法を習ふべし。是れ發菩提心なり。發菩提心は或は生死にして

之を得ることあり或は涅槃にして之を得ることあり或は生死涅槃の外にして之を得ることあり(心學法眼藏身)

○埋火のきゆるはかきもちこさなん

(行誠上人)

ちこしかねたる菩提心かな

○打かへしおもへば春のあらを田も

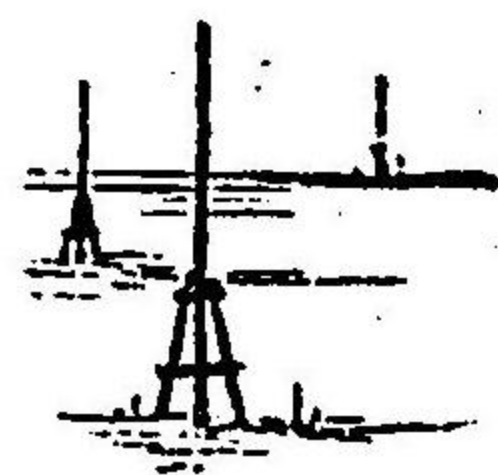
(全)

菩提の種を蒔くところなる

○おしなべて御法の花の咲きしより

(慈鎮和尚)

佛の身とはみななりにけり



第四章 發願利生

第十八節

菩提心を發すといふは已れ未だ度らざる前に、一切衆生を度さんと發願し營むなり。設ひ在家にもあれ、設ひ出家にもあれ、或は天上にもあれ、或は人間にもあれ、苦にありといふとも、樂にありといふとも、早く自未得度先度他の心を發すべし。

エー修證義の説教も追々進んで参りました、此れは第十八節であります。即ち先に申しました四大原則の中の第三で、發願利生の章であります。さて前々より申すごとく佛祖正傳の戒法がとりもなほさず佛心でありまして、その佛心といふは慈悲心と孝順心との二つより外はないのでありますから、佛祖の戒法を受けたる時

に既に佛心を得たのであるが、その佛心が朝な夕なに活きて働く有様をいへば、發願利生と行持報恩の二つである。この發願利生は即ち慈悲心で、行持報恩が即ち孝順心である。吾々御互は宿殖善根の力によつて、三世の諸佛歴代の祖師より嫡々相承の戒法を受け既に諸佛の位に上つた以上は、その諸佛の御振舞をせねばならぬが、サテその諸佛の御振舞といふは外てはない。菩提心を發して衆生を利益するのである。菩提心を發すといふはどういふことかと、いふに「菩提心を發すといふは己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營むなり」と仰せられてある。この度るといふは、河や海を渡るの義で、一切衆生が六道の間に生死往來して浮つ沈つしてある様を大海に譬へ、煩惱の迷の此岸より菩提の悟の彼岸に渡るののである。かやうに申せばソレは種々の修行をつみ悟を開いた釋迦牟尼如來や阿彌陀如來の御身の上でこそ、さやうの事も出

來るであらうけれども、吾々風情の者がどうして左様の働が出来やうぞ、到底出来ぬことを仕やうと願ふても無益のことであるから、初めよりそんな願を發さない方がよいと、かやうに考へらるゝ方もあるか知らぬが、決してさやうなものではない。勿論萬徳圓滿の佛果を得た上で衆生濟度を爲るといふが當然の順序であるから、宗旨によつては其の様に教へる向もあるけれども、我が宗では決してさうはいはぬ。曹洞宗の掟は、自分が佛にならうといふ念をサツパリ打ち棄て、自分よりは先づ一切衆生を濟度してやりたい佛にしてやりたいといふ大願を立てるのである。サテその大願をどうして立てるといふに、別段變つたことはない。只此の身このまゝにて、どうぞして有りとあらゆる一切衆生を濟度しやうといふ念を起し、是非とも濟度せねば措かぬといふ誓を立てるのである。この誓願を起すにはその身分の如何に拘はるべきでないから

「設たひ在家ざいけにもあれ、設たひ出家しゅっけにもあれ、或あるは天上てんじやうにもあれ、或あるは人間にんげんにもあれ、苦くにあり、といふとも、樂らくにあり、といふとも、早はやく自未得度じみとくど先度他せんたの心こころを發はつすべし」とある。自未得度じみとくど先度他せんたといふは、矢張やじやう前にある、已おのれ未いまだ度わたらざる前に一切衆生いっさいしゆじやうを度わたさんと同じ詞ことばであるが、この自分じぶんが未いまだ生死しやうじの海うみを渡わたり超こえて涅槃ねはんの境界けいがいに達たつせずとも、どうぞ一切衆生いっさいしゆじやうを濟度さいどしやうといふ願ねんを立てるには、たとひ在家ざいけであらうとも、出家しゅっけであらうとも、たとひ天上界てんじやうかいにある者ものといへども、又は人間界にんげんかいにある者ものでも、どのやうな安樂あんらくな身分みぶんであらうとも、又またどのやうな苦くしい境遇けいぐうにある者ものでも、その身分境界みぶんけいがいに拘からず、齊せいしく早はやくこの念ねんを起おこせよとの御勸ごんぐんぢや、之これを譬たとへてみれば、渡守わたしの船頭せんとうが人ひとを船ふねに乗のせて向むかうの岸きしに渡わたさうとするやうなものじや、船頭せんとうの方かたでは客きやくを渡わたさうといふ目的もくてきで棹さしをさして船ふねを進すすめてゆくが、船ふねが岸きしに着つくときは、乗客じやくばかり着つくのではなく、乗客じやくが着

くと、もに船頭せんとう自身じしんも共に着つくのである。了度りやうどそれと同様どうじやうで人を濟度さいどするのを第一だいいちの目的もくてきとして居ゐると、勸すすむる功德くどく共に成佛じふつで、自然じぜんに自分じぶんも彼岸ひがんに達たつせらるゝ。さすれば男女老少なんにせうせうしやう、貴賤貧富きけんひんふ、賢愚けんぐ、強弱きやうじやくの千差萬別せんさばんべつなる此この世界せかい、その職業しやくげい身分みぶんの相異さういは、どれほどであるか分わからねども、その身分みぶんその職業しやくげいがどのやうに違ちがうて居ゐても、一ひとたびこの心こころを起おこせば、任まかさず佛事ぶつじとなる。ソコで詞ことばの上うへでこそ、已おのれ未いまだ度わたらざる前まへにと申まをすけれども、其實じつじやうはこれより外ほかに成佛じふつの仕しやうはない。覺かく如上人かくにじやうじんの歌うたにも、あはれみを物ものに施ほす心こころより外ほかに佛ぶつの姿すがたやはあるとあつて、即すなはち一切衆生いっさいしゆじやうを濟度さいどしやうといふ慈悲心じひしんを除のぞいて外ほかに佛ぶつの御姿ごすがたと申まをすべきものはない。さすれば自分じぶんは百姓ひやくしやうであつて、耕作こさくが忙しいから、自未得度じみとくど先度他せんたの願ねんを起おこされぬの、我われは商人しやうじんで暇ひまがないから、衆生濟度しゆじやうさいどの心こころを發はつされぬといふべきで

ない男でも女でも官吏でも教師でも貧乏人でも金持でも誰れでも此の願心が發されぬといふ譯はない。本來具有の常住佛性の戒體を發得するまでぢや。この戒體發得の外に別に佛があつてたまるものではない。明治廿七八年の頃の事でありませう。東京々橋區船松町十番地に住む山田初五郎といふは舟乗を家業と致して居るが至つて正直にて慈悲深い性質であつた。ある時同區川岸十七號先の川中で何やら怪しい泣き聲がするので、この初五郎が耳敏く之を聞きつけ、變な泣き聲である。又悪戯小供が猫でも投り込んだのであらうと獨言きながら、たとひ猫でも犬でも助けてやりたいと思ふて、我が家を出て棧橋を渡つて泣聲のする方を尋ねて行き、て見ると、何ぞ圖らんや、猫や犬どころではなく、萬物の靈長たる人間の赤兒しかも、出産後九十日も過ぎたと思はれる女の兒が、麻の葉の衣物を着たまゝ、水中に溺れ、今二三分も捨置きなば、あはれ水

底に沈んで藻屑となるべき處、初五郎は見ると、早く水中に飛込んで、首尾よく彼の赤兒を救ひ上げ、直に奔つて警察署に届け出ました。しかし固より罪なき赤兒を水中に投入する父か母か、惡魔とも羅刹とも云はうやうなき人非人が、俄かに尋ね出さるべき筈もないから、警察署に於いては制規に従ひ、養育院へ送らうとせられたのを、初五郎が申すには、私が手で此の兒を助けましたのも、何かの因縁でありませうから、私の手許で養育致さう御座いますゆえ、どうぞ此の兒は私の養女になされて下さるやうと、眞實慈愛の心面にあらはれて願ひましたに、付警察署の役人も初五郎の殊勝に感心して、願に任せて同人へ引渡されましたと申すことぢや、いかなる人の苦勞の種か、名のりもせられぬ鬼のやうな父母の身にも、斯くと聞きましたならば、さすがに邪慳の角を折つて、蔭ながら感泣するてありませう。ナント皆様ドウ聴聞なされたか。舟乗渡世する

位であつてみれば初五郎の身分のほども大抵推量が出来ますが、その豊かにもない身分でありながら一人の赤兒を救ひ上げたばかりでなく、自分の手許に引取つて養育して一人前にしてやりたいといふその慈悲心は如何にも有難いことではありませぬか。これらこそ實に自未得度先度他の願行と申すべきぢや。この心一つで朝な夕な勤めが出来て、少しも變りがなかつたならば、たとひ身は舟乗の分際であつても、眞に菩薩といふてよい。サー皆様舟乗の初五郎でさへ、かゝる貴い心を起し、かゝる殊勝の行が出来るとすれば、誰れてもこの願行のならぬことはない。何にも皆様に是非とも捨子を拾ふて御育てなされと申すのではありませぬ。只このやうな慈悲心を以て、各自銘々の職分家業をつとめて、サテその上の行持報恩か何よりの肝要。

○參考

○問ふ諸の菩薩行業清淨ならば自ら淨報を得ん。何を以て願を立て、然る後に之を須るん。譬ひば田家の穀を得るが如し。豈復願を待たんや。答ふ。福を作して願なくんば樹立する所なし。願は導御となり能く成ずる所あり。譬ひば金を銷するに師に隨て作し。金定まるなきが如し。又佛界を莊嚴する事は大なり。獨り功德を行ずれば成ずる能はず。故に願力を要須す。譬ひば牛力の能く車を挽くと雖も、御者を要須せは能く至る所あるが如し。世界を淨うする願も亦復此の如くなるが故に(論智)

○爾時迦葉菩薩即ち佛前に於て偈を以て佛を讚す。衆生を憐愍する大醫王。身及び智慧俱に寂靜なり。無我法中眞我有。是の故に無上尊を敬禮す。發心畢竟二にして別からず。如是二心先心難し。自未得度先度他。是の故に我れ初發心を禮す(經證)

○菩提心を發すといふは謂ゆる大悲心を發して普く一切衆生を救ふが故に、大慈心を發して等く一切世間を祐くるが故に(經)

○あはれみを物に施す心より

外に佛の姿やはある

(覺如上人)



第十九節

其形陋しといふとも、此心を發せば已に一切衆生の導師なり。設ひ七歳の女流なりとも、即ち四衆の導師なり、衆生の慈父なり、男女を論ずること勿れ。此れ佛道極妙の法則なり。

これは修證義の第十九節であつて、前節の「苦にありといふとも樂にありといふとも、早く自未得度先度他の心を發すべし」とあるを承けての御言葉であつて、この「苦にありといふ」といふは、地獄、餓鬼、畜生等の三惡道のことをいふのであります。かやうな苦界に陥つて居る者でも、己に「此心即ち自未得度先度他の菩提心を發したならば、其形がいかに陋しからうとも、一切衆生の導師といふべきである。菩薩が羅刹に從つて法を聽かれ、天帝釋が野干を拜んで道を問ふたといふやうな事が、昔しから澤山にあつて、御經の中に

山あるからこれ等を長と致さねばならぬ。しかるに人間はそれ等の點については遙に禽獸に及ばぬところがあるにも拘らず萬物の靈長といふのは果して何處に在る外ではない。すなはち心である。さすれば佛といひ凡夫といふも智者といひ愚者といふのも、矢張同様であつて、その相違は容形の上ではなくて心の上である。凡夫は只自分一己の得手勝手我儘ばかりをして居るが佛はそうてなくて自分のことはさて置いて、第一に人を助けてやりたい。人に安樂をさせてやりたいといふ慈悲心ばかりである。つまり凡夫と佛との相違は、只慈悲心があると無いとのちがひである。しからば苟にも自分より外の人自分より外の物を救ふてやりたいといふ大慈悲心のある者は、その容形はどのやうにあらうとも、そんなこととに拘らず、ひとしく三界の大導師、一切衆生の慈父として、尊崇せねばならぬ筈である。又尊崇せられてよい理である。それであるか

ら其形陋しといふとも、此心を發せば已に一切衆生の導師なりと仰せられ、又設ひ七歳の女流なりとも即ち四衆の導師なり、衆生の慈父なりと御示になつて居る。護王の社と稱して、日本守護の神と崇めらるゝ和氣清麿の姉は、名を廣蟲といつて、至つて温順であつて慈悲心の深い人であつた。少い時に從五位下葛井の戸主に嫁して、よく貞實を以て夫に事へて居られたが、夫が亡くなつてからは大内に宮仕して、忠勤を拔んで居たから、時の帝孝謙天皇深くこれを信任あらせられ、正四位の下を御授けになつた。天皇御位を淳仁天皇に譲り、御剃髪あらせられた時、廣蟲も髪を截つて尼となり、法均と名づけて、尼進守大夫を授けられて居た。しかるに惠美押勝といふものが、僧の弓削道鏡が頻りに上皇の御寵愛を蒙り、その威權日に盛んなるを見て、大いに恨みまして、遂に兵を集めて道鏡を誅し、上皇即ち孝謙天皇をも押しこめんと致したが、その事が露顯

して押勝は誅戮せられ之れに與みたる者數百人殘らず斬罪に處せらんとする處を廣蟲の法均が如何にも不惑に思ひ上皇を御諫申上げて此の人々の死罪を減じて流罪にして貰ひました。それから其の翌年に飢饉と疫病とが甚しかつた爲めに民間に子を生む者が之を養育することが出来かねる處より棄子をする者が段々多くなつた。折角この世に生れて來て掌の中の玉と愛せらるゝ親の懷に添寝する事が出来ず直に餓鬼道におちるゝ如何なる野邊の露と消え果てんか飢寒に堪へかねての悲鳴の聲を聞いては心ある者誰か悲まざるへき廣蟲はとりわけて慈仁深き性質なれば非常に之を不憫に思ひ人を諸方に遣つて棄てたる子を悉く拾ひ取り自分の子として養育したのが八十三人といふ。淳和天皇は之をよみし給ひてその子供に葛木の姓を賜ひ神護景雲の二年には廣蟲に従四位の封戸井に位祿位田を賜はつたから廣蟲も

天恩の温きに感じて益すゝこの小供を大切に育て、みな一人前の身と致しました。しかるに上皇が再び天子の位に上り給ひ非常に道鏡を御寵愛遊ばされ遂に天子の御位さへも道鏡に御譲りなさらうとなされ清麿を以て宇佐八幡宮の神託を伺はせられた時清麿が歸つて神託を復命して我が國は開闢以來君臣の分定めれり未だ臣として君となれるものあらず道鏡何者なれば敢て天位をのぞむぞ速かに誅すべしと宣へりと奏し奉つたから道鏡は非常に怒つて清麿の名をけづつて穢麿となして大隅の國へ流しました。これについて法均も詔によつて還俗させ位をもけづられ名も狹蟲と改められて備後に流されました。その後光仁天皇御即位になつて清麿姉弟を召し還して舊の位に復し法均の名もものと如くなしついで從四位の下を授けられ遂に正四位の上に来て進み典侍となり延元十八年に七十にて死なりましたがのちに天

長二年に正三位を贈られました。廣蟲はかやうに立身をしたなれども、誠忠無二にて能く上を戴き下を率ゐて、少しも曲つた心はなく、光仁天皇も嘗て外の御側の人々は種々と人を嫉み誹ることあるに、法均のみは、タツタ一度も人のことを云ふたことがないと仰せられて御歎賞あらせられたといふ。それから廣蟲が臨終に弟清麿に對して、妾が死んだならば必ず法事などを盛にすることは要らぬ、只二三人の僧侶を請して御齋を上げて呉れ、ばそれで充分である、と遺言して死なれたと申すことぢや、押勝の如く上皇を押し込めんと企て、道鏡の如く天子の御位を篡はんとする亂れたる世に在つて、清麿は一命を捨て、皇室を護り、廣蟲は自分の身をつめて、夥の孤兒を拾ひ取つて養育するといふは、何れもとらぬ難有心である。清麿の誠忠はかくれなきこととて、現に護王の社と稱して、千歳の下神として尊崇せられてあるは、固より當然であるが、姉廣

蟲の心操は實に殊勝であつて、これらこそ菩薩の心であるから、一切衆生の導師とも、一切衆生の慈母とも申してもよろしい。さてかやうに云へば、それは棄子を養育する丈の資力があつたから出来たのであらうけれども、その資力のない者には出来ない、と云はるゝ方もあらうが、なにも是非とも棄子を拾つて養育せなければならぬと申すわけではない。又實際に誰でもそうはならぬは、もとよりキマツタことであるが、業はどうであらうとも、心操だけはかうありたいものである。イヤこの心操さへあれば、必ずしも直接に人を恵み物を施さずとも、今日朝から晩まで仕る事爲す事の上に於いて、少しも邪まの心と曲つた心とは出来ない。ソコで農夫は農夫、商人は商人、大工は大工、左官は左官、各その身分に隨ひ、其の職業に隨つて、只そのあるべきやうに勤めてゆくことが出来る。これが取りも直さず菩薩の不行と申すものぢや、菩薩の不行が出来れば、たと

ひとどのやうな卑い身分てわらふとも、どのやうな細かに生計をして居ても、三界の大導師に違ひなく、一切衆生の大慈父に違ひないのであるから、どうぞ此處の妙旨を合點し、佛祖の洪恩を難有く感謝して、日々夜々寝ても起きてても、行持報恩の御心掛が肝要である。

○参考

- 若し財寶多く、良福田あるとも、内に信心なく、奉施すること能はずんば、亦貧窮と名く。(戒經卷)
- 若し慳心多き者は復泥土と雖も金玉よりも重く、若し悲心多き者は、金玉を施すと雖も草木よりも輕し。(夫論丈)
- 悲心を以て一人に施す功德の大なること地の如し、己れの爲めに一切を施す報を得ること芥子の如し、一の厄難の人を救ふは、餘の一切に施すに勝る衆星光りありと雖も、一月の明かなるには如かず。(全)

○阿難佛に白さく、何をか慈と爲す佛の言く、一に衆生を慈しむこと、母の子を慈しむが如くすべし。二に世間を悲み解脱せしめんと欲す。三に解脱道意心常に歡喜す。四に能く一切を護して犯さず。これを慈心と名く。(五道)

○姿こそ深山そだちの木なれども

(西行法師)

心は花になさばなりなん

(最明寺殿)

○物乞ひにあたふるもの、なき時は

言の葉のみも情あたへよ

○唯ありの人を見るこそ佛なれ

(全 上)

ほとけも本はたゝありの人

アアアア



第二十節

若し菩提心を發して後六趣四生に輪轉すと雖も其輪轉の因縁皆菩提の行願となるなり。然あれば從來の光陰は設ひ空しく過すといふとも、今生の未だ過ぎざるに急ぎて發願すべし。設ひ佛に成るべき功德熟して圓滿すべしといふとも、尙ほ廻らして衆生の成佛得道に回向するなり。或は無量劫行ひて衆生を先に度して自らは終に佛に成らず、但し衆生を度し衆生を利益するも有り。

只今讀みあげましたのは、修證義の第二十節で、文字の數が百六十六ありまして、少しく長い御言葉であります。随つて意味も一きりに御話し申しかねます。先づ最初の「若し菩提心を發して」と云ふより、急ぎて發願すべしといふまでの七十九字は、前節に續いて此の

菩提心を發せよとの御勸でありますが、設ひ佛に成るべきと云ふより以下八十七字は、已に菩提心を發してから後の心得方を御示しなされたのである。サテ此の六趣四生に輪轉とある六趣といふは、趣はチモムクと讀む字で、衆生の生れ變り死かわりして趣くべき處といふのであります。乃ち天上、人間、畜生、修羅、餓鬼、地獄、この六種の世界を六道とも六趣とも申しますが、六趣の衆生は皆迷ひの凡夫の中であるから、之を六凡とも稱します。佛法の目的は此の六凡を離れて、聲聞、緣覺、菩薩といふ聖人の階級を踏み上つて、佛陀といふ大聖人の位に昇るのであります。しかしかやうに説くのは、普通一般の説であります。が、今吾が宗の安心は、そうてはなく、此身此儘で、そのやうな種々な階級に拘らず、天上でも、人間でも、餓鬼でも、地獄でも、因縁次第にまかせて衆生濟度をするのであるから、未來て何處に生れやうとも、少しも怖れないのである。サテ又凡そ生物

の生れるに卵胎濕化の四生といふ種別があつて、人間や犬猫牛馬などの様に形が正しく備つて生れる者がある、之を胎生と云ひ、鳥や魚の様に卵で生れるのもある、之を卵生と云ひ、ナメクジなどの様にシメリ氣で生れるのを濕生と云ひ、又蟹が蝶に生れ代り、ボウフラが蚊に生れ變る様なのを化生と云ふ。かやふに六道と云ひ四生と云ふて、衆生の生れやうも、その生れて趣く處も種々様々であるが、一たび菩提心を發して、一切衆生を濟度してやらうといふ念になつた上からは、或は人間或は天上或は地獄或は餓鬼と、何處へ輪轉と車の輪がぐる／＼と廻る様に、生れ代つてあるいても、そのぐる／＼と生れ代り死代りするのが、皆衆生濟度の大願を行ふ因縁となる。一臆懺悔滅罪して佛戒を受け諸佛の位に上つた者が、三惡道に陥るやうな事があるべき筈はないのであるが、サテ三時業といふ事もあれば、若し萬一菩提心を發し衆生濟度の誓願を立て

から六道四生の中に生死流轉することがあつても、それが皆菩提の大願を行ふ因縁となる。ソコデ然れば從來の光陰は設ひ空しく過すといふとも、今生の未だ過ぎざる際に急ぎて發願すべしと仰せらるゝ、六道四生の中に生死流轉しても、その生死流轉がその儘悉く衆生濟度の因縁となるとすれば、設ひこれまでは貪欲瞋恚愚痴の妄想煩惱に覆はれて懺悔滅罪の氣もつかず、受戒入位の心も浮ばなかつて、ウカ／＼として空しく送り過ごした光陰は詮方もないが、今やかやうに因縁が熟して、發心修行を経て菩提に進んだから、今日以後は仇に此生を送らず無常の風に誘はれぬ内に、片時も早く急いで自未得度先度他の願即ち一切衆生を濟度してやらうとの心を發せとの御示猶ほその上に御懇に設ひ佛に成るべき功德熟して圓滿すべしといふとも、尙ほ廻して衆生の成佛得道に回向するなり、或は無量劫行ひて衆生を先に度して自らは終

に佛に成らず、但し衆生を度し衆生を利益するも有り、と御示下さる。是は發心修行の結果として、設ひ自分からは求めずとも、自然に三十二相を具し、萬德圓滿の佛となるべき因縁が熟して來ることがあつても、それは自分には受けないて、その功德をソツクリ一切衆生に廻らし與へて遣るがよい。彼の觀世音菩薩などの様に、過去世には正法妙如來と申して、既に成佛得道なされた御方なれども、衆生濟度の爲めに特と菩薩の身を現し、いつまでも成佛はなされず、或は在家の身ともなり、或は出家の身ともなりして、種々様々な身を現じて、衆生濟度するといふ大願を立てられた御方もある。その思召である。現に高祖大師の御身の上に就いて考へて見ても、その御慈悲のほどがつく。難有感ぜらるゝ。高祖大師は久我内大臣通親卿の御子にて、伯父君が養子として往く。は關白太政大臣ともなされ、度思召のあつたを、御自身で發心出家して、剃髮染衣

の姿となり、あらゆる富貴榮華を打ち捨て、叡山から建仁寺の御修行遂に萬里の波濤を超えて入宋なされて、四百餘州を御遍參の末、天童如淨禪師に御相見なされて、御嗣法あり、御歸朝の後、京都の月卿雲客の御歸依を振り捨て、越前の深山幽谷に引籠り、時の執權北條時頼が鎌倉に請して大法を聽聞し、玄明長老に二千石の寺領の寄進状を持ち歸らせられたのも受け給はず、加之後嵯峨院より勅使を以て紫衣を賜りしも、却て猿鶴に笑はる。紫衣の一老僧の一偈を上つて、遂にその紫衣をも召し給はず、一生黒衣を着て御通し遊ばされたのであるが、當時各宗の高僧方は、京都又は鎌倉にて一方の大山名利に住し、王侯大臣の歸依を受け、金殿玉樓に起き臥し、綺羅錦繡を着飾つて、光り耀く榮華を極めて居られてあつたのに、引きかへて、高祖大師がかくも富貴榮華をふり捨て、質素澹泊なる御生涯をあらせられたのは、即ち御身に受けさせらるべき功德

を廻して御互衆生を濟度してやらうとの御慈悲より外はない愚かなる我は佛にならずとも衆生を度する僧の身なればと御詠み遊ばされたる御歌を思ひ合しても辱さに涙のこぼるゝ次第である。しかし高祖大師のやうな御方は格別なれども我等がやうな者がどうしてそのやうな貴い行が出来やうぞと思はれる御方もあらうが決してさうではない。毎度申す通り決して身の行を高祖大師の通になされと云ふてはない、いやよし云ふたとて誰れにでも出来るものでもないが、但その心だけはすれば出来ぬといふ譯はない。してみれば其の職業の如何によらず其の身分の高下に拘らず朝な夕なの爲る事作す業の上にて自分の爲めばかりを思はず、自分よりは先づ一切衆生の爲めになる様に行ふのが、とりもなをさず此の文の御旨意に叶ふのでありますから、吳々も利他の心掛が何よりの肝要であります。サテその身の行方はどうしてよ

いかといふことに就いては、次の節に於いて御示しになつて居るから、その處にて詳かに御話申しませふ。

○参 考

- 見ずや小蟲畜類すら其の子を養育することを身心艱難經營し苦辛し畢竟長養すれども、父母に於いて終に益なし、然れども子を念ふの慈悲小物すら尙ほ然り自から諸佛の衆生を念ふに似たり。(學道用心集)
- 毎に自らは是の念を作す、以何が衆生をして無上道に入つて速に佛身を成就することを得せしめんと。(法華經)
- 一切を慈悲して懈怠の心を生ぜざれ。(安樂行品)

○なか／＼に人より物をおもふかな (後醍醐天皇)

世をおもふ身の心づくしは

○鈴鹿川八十瀬の浪の立ちぬにも
我が身の爲めの世をば祈らす

(崇光天皇)



第二十一節

衆生を利益すといふは四枚の般若あり。一者布施、二者
愛語、三者利行、四者同事、是れ即ち薩埵の行願なり。其布
施といふは貪らざるなり。我物に非れども布施を障へ
ざる道理あり。其物の輕きを嫌はず、其功の實なるべき
なり。然あれば則ち一句一偈の法をも布施すべし、此生
他生の善種となる。一錢一草の財をも布施すべし、此世
他世の善根を兆す。法も財なるべし、財も法なるべし。但
彼が報謝を貪らず、自らが力を頒つなり。舟を置き橋を
渡すも布施の檀度なり。治生産業固より布施に非ざる
こと無し。

これは修證義の第二十一節で、二百十三字もありまして少し長い
御示してあります。前節に於きまして「衆生を度し衆生を利する」と

ありましたは、諸大菩薩の行願であつて、到底吾等今日の境界では、企て及ぶべきと思ふ向もあらうけれども、決してそうではないと、その疑を解いて、その衆生を利するといふことはかやうである、その利益の仕方、御示し下さるのであるから、衆生を利益すといふは四枚の般若ありと仰せる。四枚といふは四通といふこと、般若といふは天竺の語で、支那の語に譯すると智慧といふことになり、すが、只智慧といふては善い智慧もあり、悪い智慧もあり、種々様々でありますから、特と譯せず、般若といふてあります、すが、ツマリ佛の大智慧を申したものでありまして、茲ては尊い法といふ位なことに、見てよろしい。ソコで一切衆生を利益するには、四通の尊い法がある。その四通の尊い法といふは何であるかといふに、一者布施、二者愛語、三者利行、四者同事の四通である。これは只その名目であります、すが、この四通が利益衆生の方法であるから、是

れ薩埵の行願なりとある。薩埵は梵語の菩提薩埵を畧したので、菩薩といふのも、矢張この薩埵を畧したのであります、すが、今茲の薩埵とあるのも、菩薩と同じことである。即ち觀世音菩薩、勢至菩薩などといふ菩薩といふ語であります。一體この菩薩といふは大心衆生といふこと、で、自分さへよければ、人はどうでもよいといふやうな、小ない心でなく、自分で佛道を得て、一切衆生を濟度してやりたいといふ大きな心を有つてゐる人々の身の上を申したものであります、から、何にも觀音菩薩、勢至菩薩に限つたこと、でなく、既に佛戒を受けた御互は皆菩薩である、年寄でも若い者でも、男も女もの、こらず悉く菩薩じやと心得ねばならぬ、行願といふは、行は身の作業、願は心懸、この心懸と作業とが二つ揃はぬといふと、何事もなりたぬ、ゆゑのであるから、行と願とは鳥の兩翼の如きもので、一を欠いてはならぬと、御經に説いてある。ツマリ吾か宗門に於いては、既に

佛祖正傳の大戒を受け菩薩の身となつた御互は布施愛語利行同
事この四通の尊い法によつてとうぞして一切衆生を利益しよう
といふ念願を有つて日用少しもこの心を失はずに一切萬事をつ
とめ行へよとの御教訓さて其布施といふは貪らざるなりとある
一鉢布施といふ布はシク施はホドコシといふ字であります布
施といへば僧侶に錢を進せること施といへば貧窮人や乞食に物
を與へることばかりの様に思はれてありますけれども決してそ
うでないから高祖大師が判然と貪らざるなりと仰せられてある
さすれば自分の物を人に與へるばかりが布施ではなく人の物を
欲しがらぬが第一であるそれから富貴であつても人に驕らず貧
乏であつても人に諂はず只正直にして一點も曲つた心なくその
職分を盡くしてゆけば自然に布施の功德がその中に具つて居る
たとへば農夫は農夫商人は商人前日も今日も仕事に變りはない

が只前日までは爲ること作すことが皆貪欲心より起つて己れ一
人の私利を謀り我が田へ水を引き我が店へ客を招くことばかり
をして居たのが今日佛戒を受けて衆生濟度の行願を先とするや
うになつてみれば爲る事作す事が皆公共の利益となるこの公共
の利益がとりもなほさず布施である決して自分の物を人に與へ
るばかりが布施ではないソコで我物に非ざれども布施を障へざ
る道理ありと仰せらる。それゆえ布施をなすに其物の輕きを嫌は
ず其功の實なるべきなりとあつて施し與へる物の多い少いや重
い輕いを論ずべきではない只その施すところの人與へてやる對
手に取つて眞實の功德即ち利益があるか無いかといふとに氣を
つけねばならぬ既に其物の輕重多少に拘らぬとすれば何ほど僅
かばかりのことでもよいのであるから然れば則ち一句一偈の
法をも布施すべし此生他生の善種となる一錢一草の財をも布施

すべし、此世他世の善根を兆すと財法二施の様子を指示になる。二句一偈の法とあるは法施で何事によらず自分に知つて居る事を惜まずに人に教へてやるのを法施といふ。たとへば今この修證義の中の無常憑み難しといふは一句、造惡の者は墮ち修善の者は陞るといふも一句、我昔所造諸惡業の懺悔の文、衆生佛戒を受くればの受戒の文などは一偈であるが、かやうな一句一偈の法を説いて、人に安心を與へてやるといふやうなことは勿論往來て道に迷ふて居る人に道を教へてやるのも皆法施である。一錢一草の財とあるは財施で、一文一筋でも人の爲めになることなら何でも施すといふやうに、一切衆生は皆自分の子である、自分は一切衆生の慈父である、一切衆生は皆自分の弟子である、自分は一切衆生の導師であるといふ心を失はずに、朝夕の事をなしてゆけば、何一つとして布施でないことはない、たとひ一句一偈の法を施し、一錢一

草の財を施しても、此世彼世の善根功德となる。しかし善根功德となるといふ語を聞いて、サテハ少しばかりの施をしても、その善根功德は廣大であるならばといふて、自分の利益を得るのを目的にして施しをするやうでは、眞の功德にならぬ、サテ箇様に法施と財施と兩方あるやうに説いてあるが、是れはドコマデ違ふたものではなく、この二つの施し方が一つに圓融して、法施が財施ともなれば、財施も法施ともなる例へば、自分に學問が無ければ人に教ゆることは出来ないけれども、その代りに學資を與へて學校に入れて學ばすれば、自分で教へたと少しも違ひが無から、財施がとりもなほさず法施である。又自分に金錢が無ければ施すことは出来ないけれども、斯様々にすれば、金錢が手に入るといふことを教へてやつて、その人が金錢を得ることがあれば、自分の手から金錢を與へたと少しも違ひがないから、法施がとりもなほさず財施で

ある。ソコで法も財なるべし財も法なるべしと畢竟して二つが一つ、一つが二つの道理を御示しになつた。この道理を合點した上からは財法二施どちらをするに就けても此方の心の置き方が大切であるから、但彼が報謝を貪らず自らが力を願つなりと御教訓になつてある。物を知らぬ者や貧乏人に學問技藝なり金銀衣食なりを施して、それを恩に着せ禮をいふて貰ふとか、恩報を爲さうなものじやと思ふてはならぬ。只此方の力を願ち與へて先方に利益を得させてやりたいといふ慈悲心から致さねばならぬ。犬や猫が子を産み、之を育て、成長するに、この子が成長したならば養はれうの世話にならふのといふ考はない様に見ゆる。まして萬物の靈長といはるゝ人間のその中でも、三界の導師衆生の慈父と云はる身が布施を行ふてその子や弟子から報謝を受け度いと云ふ様な卑しいことがありませうか。天地萬物は皆互に力を願ち合せし

て立つて居るもので、太陽は光を願つて我々に明を施し、五穀の如きは其の身を我々に施して、我々の生命を維がしむるが、太陽や五穀が報謝を求めたことは決してない。しかるに我々人間は一己の私欲に蔽はれて人を排しのけても自分の利益を貪り、又たまゝに布施をしても直にそれを鼻にかけ、社寺に寄附をすれば掛札に名を署し、惠金をすれば新聞に廣告をすると云うやうに、何とかして自分の名利を謀る。かくては犬猫や草木にも劣つたる次第で、實に愧しいことではあるまいか。サテ前には一錢一草といふて、極小さい直接な布施を御示しになつたが、茲には大きくして間接な布施の仕方を御示しになるので、舟を置き橋を渡すも布施の檀度なりと仰せらるゝ。檀度とは檀那の略したので、檀那は天竺の語で之を譯すれば布施といふことである。度は天竺語の波羅密といふを、支那語に譯したのであつて、ツマリ檀度の二字で布施の行といふは

どのことである。サテ舟を置き橋を渡すと云ふても、昔し行基菩薩
や弘法大師などがなされたやうに善根橋とか施行渡とかいふて、
無賃で旅人を渡せる様なことばかりでない。たとひ相當な賃金を
取る橋や渡舟、さては蒸氣船や鐵道でも、又は製絲場でも、機織場
も、之を起して成就させたその人の心懸が眞實に世上一般の便利
や利益になるやうにといふとてあつたなれば、其商法がとりもな
ほさず直に布施の檀度になる。ソコで治生産業固より布施に非る
こと無しといふ御示がある。治生産業といふは人々各自の職業即
ち農業なり工業なり商業なり、さては教師官吏醫者代言等すべて
渡世の業を營むことである。人々各自の渡世の業務そのまゝが、そ
の營む人の心懸一つで悉く布施の功德になる。『法華經』に資生産業
も實相に違背せずとあるのも此のわけてある。然るに之れに反し
て何程の金錢や米穀を貧民や罹災人に施し、或は養育院や孤兒院

に澤山の金錢衣類食物等を寄附したりなどしても、その布施を以
て商業の廣告となし、自分の名譽を得ようといふやうな名利的慾
心から起つたのであれば、ツマリ慈善とか布施とかいふ名義を以
て、自分の名利を食する手段とするのであるから、布施の功德になら
ぬばかりでなく、前にあつた布施といふは、食らざるなりといふ定
義に背くから、偽善といつて大きな罪となる。ソレで古人は陰徳と
いふことを重ぜられた。陰徳といふは、布施をするのに、誰が施した
かその施を受けた人に知れぬやうに、コッソリと物と物と與へ、又は人
の爲めになる事をするのである。例へば貧民の家に夜中に人知れ
ずに物を恵むとか、又は無各で慈善金を出すといふやうなことで
ある。誰れが恵むだとも施したとも分らんければ、之を受けた人も
誰に禮を云ひやうもない。禮の云ひやうはないが、その有難さは却
て一層深く感ずるから、その功德は無爲の功德となる。この無爲の

功徳こそ眞實の布施といふことになるのである。陸軍中將子爵谷干城氏の夫人玖満子といふは、弘化元年に土佐の國に生れられた。夫人の父は藩主山内容堂公に使へて、二百石の祿を頂戴して居られたなれども、中々賢明な人であつたから、女子の教育に力を入れて、玖満子嬢の成長を樂んで居られた。かやうな風であつたから、玖満子嬢の成人するに随つて、その才藝の人に優れ、女徳の衆に超えて居る評判が高くなる。ところから、藩中の勢のよい家より競ふて嫁に貰ひたいと申しこんだ。さうである。さて此時谷氏は藩中の小身であつて、漸く五人扶持を貰つて居られたなれども、風采氣骨の凡庸でなく、賢才の人に優れてゐるのを見て、玖満子嬢の父はこの男は、一ト風異つて居る、かやうな人物こそ自分の婿にすべきであると思ふて、遂に玖満子嬢を谷氏に嫁入さすことに定められた。いよゝゝ結婚といふに先ちて、玖満子嬢を戒めて云はれるには、干

城の才は當時に罕れてある。今こそ五人扶持の小身者であるけれども、人の下に居るものでない。今天より良縁を結ばせられて、汝にかやうな結構な婿を授けられたのであるから、慎んで貞節を誤るなよ。若し汝が不敏で干城に事へること出来なかつたら、その時は、身と心を二つにして、身は夫に委ね、心はこの父に返せよと云つて、短刀一口を授けられた。そこで玖満子嬢は感涙を流して云はれるには、妾は不敏なものでありますけれども、必ず父上の御言葉を守つて勉めます。萬一つとめ損じましたらば、死んで御謝をいたしますと、覺悟のほどを示して、谷氏に嫁入いたされた。スルト只さへ五人扶持の小祿で貧しい生計であるに、子供も出来てみれば、生計もますます困難になりますことゆゑ、玖満子夫人は大いに奮發して、自分で木綿の鯉口、即ち筒袖にして、魚屋の常に着るやうなものを仕立て、それを着て朝早く町に出て、馬糞を拾ひ、夜は歸て草鞋を

作り、それを自分て賣つて家計を助けなどして、谷氏の立身を扶けられたが、後果して谷氏は次第に出世せられて、明治十年西南の役か起つた時には既に陸軍少將になつて居られたから、熊本鎮臺の司令長官として、加藤清正が築いた熊本城を守つて居られた。しかるに賊將桐野利秋、篠原國幹等は、大兵を率いて追つて来た。谷將軍は籠城堅固にして、數々賊兵を追ひ斥けられたなれども、何分七重八重の圍みの中に在ることゆえ、追ひ／＼兵糧は乏しくなるところから、城中に於いては粥を啜つて僅に飢を凌いで居る。始末、珍満子夫人は常に炊事を指揮し、自ら鐵砲の丸が飛び来る中を物ともせずして、彼處此處に奔走して世話をなし、又力めて將軍の氣を勵されたが、猶ほ案じられてならぬから、素から夫人の心を知つて居る下婢に申し付けて、時々將軍の様子を窺はせられた。下女が飯つて来て、將軍は今天主閣に御出なすつて、雙眼鏡をもつて賊兵の

様子御覽になつて居ますが、彈丸は蝗の如くに飛んで来て、數々帽子に中りましても、ビクともせずして御覽になつて御出でますと申したれば、夫人はア、そうであつたかと云つて、大きに喜ばれたといふ。そうこうする内に、兩軍入り亂れて戦ふ中に、兵卒が少しく疲れた頃、夫人は大釜で小豆を煮、鐵砲の烟で眞暗くなつて居る間に、手ら牡丹餅を作ひ、又堤の裡や諸方を探して、三つ葉葦嫁菜の三種を摘んで来て、それを酢に浸して、一同の兵士に饗まはれた。スルト城中の兵士は、大きによろこび、籠城中にこんな甘い物はなかつたと云つて、皆々喉を鳴らし舌打ちして食べました。かくて賊軍は遂に敗北して、誅戮せられ、官軍は首尾よく凱旋をあげて歸りましたが、それから熊本籠城會といふ會が出来て、當時籠城をした將校士卒等が寄合ふて、籠城中の難儀話をせられることであるが、その會毎には例の三つ葉葦嫁菜の三種と牡丹餅が出来て、それを喫

べて苦戦の紀念とすることである。その度毎に何れも夫人の賢いことを讃めぬものはないと申す。夫人は今陸軍中將子爵の奥方となられてあつてみれば、萬事意の儘ならぬことはない身分でありながら、その行ひは矢張昔の通で、常に木綿の衣を着て萬事に節儉を守つて居られるが、桑を作り養蠶などはとりわけて夫人の好むて居られる事として、常に五六人の奴婢を使ふて、自分が先きに立つて致される。それからその五六人の奴婢が居ても、夫人は晨真先に起きて飯を炊かれるのであつて、奴婢等はその飯が炊き付られる音に驚いて始めて目を醒ます有様であるといふ。明治廿五六年の頃であつたが、北白川宮様が將軍の邸に御光臨があつた時にも、夫人は例の鯉口を着て宮様の前に出て、昔の事どもを詳しく申し上げられたれば、その席に列つて聽いて居た人達は、何れも感極つて泣いたと云ふことである。かやうな家庭でありましたから、谷氏の

一家は平素は皆節儉を守つて冗費を省き、貧窮人や不幸者には施をなし、惠物をすることを樂しみにいたして居られる。竹の中に生えた蓬は、扶けをせずとも自然に真直である如く、子女はその家風によつて性品が定まるものであるから、夫人の孫女芳子嬢といふは、今年二十二であるが、一昨卅三年兼て出入の呉服屋が一筋の帯地の高價なのを持って来て、夫人に買上を願ひました。夫人は地柄も氣に入つたから、芳子嬢を呼んで之を見せられると、定めて大きに喜ばるゝと思ひの外、直ぐさま父子爵の間に來て、兩手をつき、只今あんな結構な品を買ふて頂くは、誠に難有御座います。が、妾は外に五六本もよいものがありますから、今さし迫つて入用はありませぬ。その代り報効義會の子供達が、千島に居て不自由難儀せらるゝといふことと兼て、何か贈りたいと思ひ居りましたから、帯の代りに心ばかりの贈物をさせて下さるやうにと云はれましたから、子

爵は坐に芳子嬢の心に感じ、夫人と相談して芳子嬢の名前にして直に金五十圓を報効義會へ寄贈し、又右の帯をも買入れられたが、夫人は芳子嬢の優しき心根に感じ、自分も何にか義會に贈らうと思ひ、六十に近き老体をも厭はず、夫人の姉なる人と兩人にて夜を日に繼ぎ丈夫一方の手織木綿五六十反を繰り上げて、先釋義會へ寄贈せられたれば會長郡司大尉は子爵一家の厚意に感泣し、芳子嬢の贈られた五十圓を以て机硯紙墨等を買ふて、昨年五月千島に送り、尚ほ今年夫人より贈られた反物は報効丸に積み込んで、夫人が機織に従事して居られる處の寫眞と、芳子嬢の寫眞とを添へて千島へ送られたといふことである。三つ葉章嫁菜に牡丹餅を施すは、何程のことではありませんけれども、玖満子夫人が戰爭中で雨霰とふり来る彈丸の間を、彼處此處に奔り探して、兵士に饗をせられたその志は、千萬兩にかえ難い殊勝な志であつて、其物の輕さを

嫌はず、其功の實なるべきなりとある御示しに叶ふて居る。それから芳子嬢が年盛の身でありながら、帯の代金を報効義會の子供に贈るといひ、その志に感じて玖満子夫人が手織木綿を織つて義會の小供達の衣類に用ひられるやうにと寄贈せられたのは、實に能く彼が報謝を食らず、自らが力を願つなりとある御言葉に契ふて居る。富貴の身分では只金錢や品物を恵むてやるといふことは、いと易いことであるけれども、玖満子夫人、芳子嬢の如き志より布施をする者は甚だ稀れてある。谷氏一家の宗教に對する感念は、どうであるか知りませぬけれども、その心懸と行ひは慥かに佛祖の御教に契ふて居るから、特に掻い摘まんでその大略を御話し申したのであります。かやうな心懸を有ち、かやうな行をしてゆくのが、とりもなほさず三界の導師、一切衆生の慈父と申すのであります。御互に宿殖善根の力によつて、既に佛祖正傳の大戒を受け、位大覺

に同うし已ると云ふ身分であつてみれば、どうぞ谷氏一家の人々の心を心として、これを身に施して、朝な夕な、の行にあらはしてゆきたいものである。これぞ即ち御互が佛祖へ對するの報恩である。と御心得が肝要。

○参考

- 施に三種あり、一には財施、二には法施、三には施無畏なり。(智度論)
- 罪業を起さず、福業を起さず、無動業を起さざる者、是を佛を供養すと名く。(勝思惟)
- 貪らずといふは、世の中に言ふ詔はざるなり。(正藏)
- 未だ明めされば人の爲に説く可らずと思ふこと勿れ、明めんことを待たんは無量劫にも叶ふ可らず。(上全)
- 凡そ學佛祖道は、一法一義を參學するより、即ち爲地の志氣を衝天せ

しむるなり。(上全)

○東邊にして一句をさして、西邊に來りて一人の爲にとくへし。(上全)

○身をつめてあきる財を望む身は (最明寺殿)

まづしき人にほとこさんため

○おごりなきこゝろを代々の寶にて (慈雲尊者)

つさせぬ家のまもりとも見よ

○法の爲め國の爲めとて身の限り (介石上人)

つくして果てん倒れふすまで



第二十二節

愛語といふは、衆生を見るに、先づ慈愛の心を發し、願愛の言語を施すなり。慈念衆生猶如赤子の懐ひを貯へて、言語するは愛語なり。徳あるは讚むべし、徳なきは憐むべし。怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること、愛語を根本とするなり。面ひて愛語を聞くは、面を喜ばしめ、心を樂しくす。面はずして愛愛を聞くは、肝に銘じ、魂に銘ず。愛語能く廻天の力あることを學すべきなり。

これは修證義第二十二節で前節の四枚の般若の中の第二なる愛語といふこと御示し下さるのである。愛語といふは慈愛の語といふことで、やさしく情ある語である。語といへば只口の上ばかりのやうにもけれるが、菩薩の行願は身口意の三業がみな揃はなければならぬ、ソコテ慈愛親切の語といふものは、慈愛新切の心から湧き出て、口にあらはれなければならぬ。若しそうてなくして、只口先きばかりで柔和なやさしい言をいふても、心の中に慈悲愛情がなかつたならば、それは諂諛といふもので、甚だいやしむべきものである。それゆえ先づ愛語の定義を下して、愛語といふは衆生を見るに先づ慈愛の心を發し、願愛の言語を施すなりと仰せらる。一切衆生に對して、誰れ彼れの區別なく、御五人類は申すまでもなく、苟にも情ある者を見ては、その物を慈しみ可愛がる心を發して、愛らしいやさしい言語をする。その慈愛の心といふは、どういふ心かといふに、慈念衆生猶如赤子の懐を貯ひてと御示しになる。この慈念衆生猶如赤子の八字は、『法華經』提婆達多品の中に、文殊菩薩が八歳になる龍女を讚められた詞であるが、一切衆生を慈しみ念ふことは、恰ど慈母が赤子を念ふやうであるとの意である。今愛語といふはこの慈母が自分の赤子を慈念する如き、慈愛の心を懐の中に

貯ひて居てその慈愛の心から柔和なやさしい物言ひをする。さてその愛語の様子をいへば、徳あるは讚むべし、徳なきは憐むべし、凡そ世の父母たる者は、己が子に善い行があれば少しにても之を讚め、又悪い行があれば、そのやうな事をしてはなりません、その子の行末を案じて憐みを加へて、之を諭して止めさせる。親が子を讚めるのは、その子に諂ふのではなく、又子を諭すのも、決して之を悪むのでもない、但善い事をすればその上にも善くなれかじと思ふて之を讚め、悪い事をすれば、あのやうな心懸ては先きで難儀をする。ことであらうと思ひ、その子が不惑さに之を諭して改めさせる。丁度ぞの如く、我々御互も一切衆生に對つてよい行がある者は少しにても之を讚めて、益之を勤めさせ、又わるい行があつても、それを責め罵るやうなことをせず、もの柔かに諭して改めさせるやうに致すべきである。かやうに致してゆけば、大いなる功德がある。そ

れは、怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること、愛語を根本とするなり」と、愛語の功德を御示しになる。口は禍の門といひ、又物の言ひやうで角が立つといふ語もあつて、常は此方を怨み敵對して居るものでも、此方より愛語を以て之れに對すれば、先方も遂に悪意を翻して、此方に伏従するやうになる。又君子といふは、儒者の方で、有徳の君子、在位の君子の別を立て、あるが、此處では有徳の君子ではなくて、在位の君子であらう。在位の君子といへば、國王とか大臣とかいふやうな人達である。國王とか大臣とかいふ人達は、概して我慢の強いものであるから、意見が違へば、中々容易に和睦せぬものであるが、それも愛語を以て接してゆけば、國王と國王と戰つて居る軍を止める様なこともある。面ひて愛語を聞くは、面を喜ばしめ、心を楽しくす、面はずして愛語を聞くは、肝に銘じ、魂に銘ずといふは、實に能く人情を穿つた御言葉である。顔と顔を見合せて居て、

やさしい言愛らしい言を聞くときはたとひ御世辭とは知りながらも誰れでも悪い顔をするものもなければ厭な心持になる者はないのは申すまでもないがそれよりは蔭で自分のとを好く言ふて居るといふことを人傳に聞けば身に染みくと思ひてそれほどまで自分をよく思ふてくれるかと思へば眞實肝に徹して嬉しに相違ないかやうに人が肝に徹して嬉しと思ふ心の力は廣大なるものであつてこれまでの心を一變するやうになる愛語能く廻天の力あることを學すべきなりとは廻天は天を廻らすと訓んで天然自然に斯くなければならぬと定まつた事でもそれを引き廻して天然自然の物事を動かすといふ意味であるが愛語は實にこれほどの力があるものゆえによくこの廣大なる力あることを知つて露聊も暴々しき語を吐かず如何なる場合にも愛語を以て接せよと愛語の功力廣大なることを示しての御教訓じや。

昔し伊太利のアルフォンソといふ王は天資溫和にして慈愛の心深く渡せられ管てアラゴンといふ處の王であらせられた時からして深く心を臣民を愛撫する事に盡され常に儀仗兵をも連れず市中を御通行なされ居つたから一人の臣下がかやうにして御歩きあつては危うござりますと御諫言申し上げたれば親子の間に何の恐しいことがあらうかと仰せられたこれは常に市民は王の子王は市民の父と思召して居らるゝからの御言葉である又兵士等が淺底舟に乗つて沈みかけんとする様子を御覽になるときは自分はヨウして兵士等の災難を見るよりは一層彼等と共に沈みたいと仰せられて端艇に飛び乗つて救に赴かせられる又謀叛を企てた貴族等の姓名を記した帳簿を御覽に入れても決して之を見給はずして直ちに裂いて棄て、善人は公正を以て取扱へば善いことを爲し悪人も慈愛を以て接すれば自然に善人となると

仰せられたといふ先帝御崩御の後に、チーブルス并にシ、リーの二ヶ國に王とならせられたが、これより先き王と位を争ふ者があつて、戦争することになりました。此時敵兵はグータといふ市街を守つて居つたから、之を圍んで攻めました。スルト敵の城中に於いては次第に兵糧が減つてくるから、兵士の食糧を保つ爲めに、市中の老人、幼童、婦人等を城外に追ひ出すことになりました。これを城中に追ひ歸しましたならば、城中は食盡きて降参するより外はないのでありますから、將校士官は皆追ひ歸さうと申しました。なれども、アルフオンソ王は、斯くては多くの市民がいれば、かり苦しむか知れぬ自分けたと、ひ百のグータを得ることが出来ても、斯る多くの幸なき人民を苦しむることは出来ぬと仰せられて、遂に路を開いて、彼の老人、小供、婦人等を通ふしてやられました。スルト將校等は驚いて、今までかく困難をしてこの城を攻め、今や食盡きて遠か

らず降参するといふ時になり、あの如くの人を城中から出させてやるとは何たる馬鹿しいことぞ。今日までは我が君は天晴名將と思ふて居たが、今日の仕打を見ては狂人としか思はれぬと申して居た。しかるに愛語の力は恐しいもので、アルフオンソ王が市民に對する仁慈の語を聞いて、城中の人大いに感じ、敵たる吾々に對してかくまで慈愛深き仁君に、いかて抵抗がなるべきと申して、間もなく降参したといふ。兵力を以て攻めても久しく抜けなかつた。グータの城もアルフオンソ王の慈愛の一語が市民の肝に感じ、魂に徹したから、かくも俄かに降参するに至つた。はこれぞ即ち愛語能く廻天の力あるといふ證據である。してみれば、既に佛戒を受けて、一切衆生の慈父、三界四衆の導師となつて居る御互は、親族、朋友の間は勿論、如何なる人に如何なる場合に逢ふても、猶如赤子の懷をもつて慈愛の語をもつて接せねばならぬ。これすなはち御互我々

が佛祖に對する報恩の行持であるから朝な夕なに是非とも守らるゝやう。

○參考

- 二種の愛語あり、一は衆生を憐愍するが故に其の意に隨順す是を隨意愛語と名く。二は衆生の愛する所に隨順して爲めに説く是を隨行愛語と名く。(論智)
- 唐の張玄素諫議となり切直敢言す太宗洛陽官を修めんとす玄素力諫して中止す魏徵嘆じて云く張公が事を論ずる廻天の力あり仁人の言は其の利溥しと謂ふべし。(增補書言)
- 若し人あり來つて節々に支解するとも當に自ら心を攝めて瞋恨せしむることなかるべし亦當に口を護つて惡言を出すことなかれ。(佛經教)

- 若し其れ惡罵の毒を歡喜し忍受して甘露を飲むが如くすること能はざる者は入道智慧の人と名けず。(上全)
- 國を治むるは惠施を以て善となし道を修むるは人を導くを以て正と爲す。(自愛語)
- 王は父母の如く愛念して差なし國人は子の如く並に忠孝を懷く。(法王經)

○慈悲の眼に悪くしと思ふものぞなく
 罪ある身こそなほあはれなれ
(よみ人しらす)



第二十三節

利行といふは貴賤の衆生に於て利益の善巧を廻らすなり。窮龜を見病雀を見しとき、彼が報謝を求めず、唯單に利行に催ふさるゝなり。愚人謂はくは利他を先とせば、自らが利省かれぬべしと、爾には非るなり。利行は一法なり、普ねく自他を利するなり。

これは修證義第二十三節で、四枚般若中の第三番めの利行といふことに就いての御示。利行といふはその身分の貴い賤いに拘らず、一切衆生に對して利益を與へることである。利益を與へるといへば何か自分より目下の者だけに對してのやうに思はるゝから、そうでないことを此示しになつて、特に貴賤の衆生に於てと仰せられてある。自分より目下の者に利益を與へるといふは何の教でも申すことであるが、自分より目上の人に對しても同様にせよとい

ふは、佛教の特殊なところである。善巧といふは、臨機の方便とても申すことであるが、ツマリその時その事に臨んで、上下貴賤の別なく、何人に對しても、その人の利益になるやうに、手際よく物事をなすことである。その上下貴賤の別なく同じやうに利益の善巧を廻らすといふが、佛教のいはゆる平等大悲の主義である。それ一個人に對すれば、一個人の利益となり、一國に對すれば、一國の利益となる。サテその利益の善巧を廻す上の意得方は、窮龜を見病雀を見し時、彼が報謝を求めず、唯單に利行に催はさるゝなりと、その實例を引いての御示し。ちや窮龜の事は『晋書』に在る話で、昔し晋の世に名は孔愉字は敬康といふ人があつたが、一日餘不亭といふ處へ往きましたところ、が龜の子を籠に入れて持つて往く人があつた。その龜の子はドウスルノかと尋ねましたれば、殺して喰ふのであると答へましたから、孔愉はコレは如何にも不便なことであると思

ひましてドウソ私にその龜を賣つて呉れと申して相當の代金を遣はしその龜の子を水へ放してやりました。スルト龜はいかにも嬉しそくに泳ぎながら左の方へ首を傾けては孔愉を四度もフリ廻つて見て遂に水の中へ沈んで仕舞つた。然るにその後その龜が孔愉へ大層な恩返しを致したといふ。その話は第二十八節に委しくあります。又病雀といふは『續齊諧記』に出て居ることで昔し支那に揚寶と云ふ人があつて九歳の時に華陰山といふ處に遊びに往きました。ところが一羽の雀が鴟梟といふ強い鳥にヒョク搏たれて飛ぶことが出来ず樹の下に墜ちて蟻にせめられて居るのを見ました。から子供心にも可愛さうに思ひまして蟻を拂ひ除けて宅へ連れて歸つて小さな箱に入れて養つたこと百日ほど経ちますと、羽毛も舊の通になつたので揚寶が箱を開けて放してやりましたればその後その雀が大層な恩返しを致したといふ。その話も第

二十八節に委しくあります。かやうに孔愉が餘不亭で殺される龜を見たときにせよ、又揚寶が負傷をして居た雀を見た時にもせよ、決してその後恩返しを致して貰ふといふやうな事を思ひ、それを當てにして救ふて遣つたのではない。只なんとなぐ不便で可愛さうでならなかつたから知らず知らず利益の善巧を行ふたのである。そこを彼が報謝を求めず單に利行に催ふさるゝなりと仰せらるゝ。この報謝を求めず即ち先方の恩返しを當てにせぬといふ心懸が肝要であるのぢやが慈悲心のない者は唯自分の慾にばかり目が眩んで他人に利益を與へることを忽にするから、それを氣の毒に思ひ召されて愚人謂はくは利他を先とせば自らが利省かれぬべしと爾には非るなり。利行は一法なり普ねく自他を利するなりと仰せらるゝ。自分の事をさて措いて他人に利益を與へることを先としてゆけば、自分の利益は無くなつて仕舞ふとかやうに愚

痴を起す者もあらうが決してそうでない利行といふは他人には
かり利益になつて自分の利益にはならぬといふやうな別々な法
てはない。盡十方法界唯一法の利行であるから一人が一の利行を
爲せば盡十方法界みな其利益を蒙る既に盡十方法界といへば自
分も自然にその中に入つて居る譬へてみれば醫者である。醫者は
人の病を治療し人の生命を助けたいと一心に人の利益を思ひ自
分の難儀を忘れて手術診察を致せば病人負傷人はその爲めに利
益を蒙ることは勿論であるがされば醫者當人はドウデあるかと
いふに自分の身を忘れて他人を助け救ふてやればその助けを受
け救ふて貰つた人達は必ずその恩返しとしてその醫者に謝禮を
するから醫者の家は自然に繁昌するが若しそうてなく初めから
只自分の利益ばかりを謀つて病や負傷が治らうが治りまいがソ
ノナ事はどうてもよい。少しでも金さへ取れればよいといふやう

な我慾を先に立て仕事を致したならば決して繁昌することはあ
りませぬ。この道理は醫者ばかりではなく官吏でも教師でも商人
でも農夫でもみな同じ事でありましてこれを因果の法と申して、
少しも間違はないのであります。地中海のゼノアといふ處は嘗て
商業の盛なる都會であつたがこの時民黨政府の首領ユーベルト
と云ふ人は微賤より起り才力と勉強とによつて富饒の紳士とな
つた人であつた。その後貴族と民黨と烈しい争が起り遂に貴族が
民黨政府を打ち倒したるに付ユーベルトを捕へて反逆人として、
その財産を沒收して終身ゼノアの土地より追放を申付た。ユーベ
ルトは裁判宣告の日になり新任の裁判長アドルノの前に引出さ
れた。アドルノは自己の家柄を自慢することばかりを知つて毫し
も人を憐むといふ心のない貴族であつたから此時ユーベルトに
對して尤も貶げしんだ辭にて其方は下賤の職工の子でありなが

ら畏くもゼノアの貴族を踏みつけんとしたるは不届至極な大罪
てある併し特別の憐愍を以て命を免して元の赤貧の境界に墜し
くれんと言ひ渡しましたれば、ユーベルトは只首を垂れて謹んで
宣告に服しました。かくてユーベルトはチーブルスといふ市の二
三人の商人に貸付の有つたのを取りまとめて、ベニス領内のア
チピラゴの島に渡つて、多年鍛へた才智を以て奮發して商業を
営みましたから、忽ちにして金持となり、諸方に赴いて益々盛んに
取引を致して居りました。ある時チユニスといふ都府に行きまし
た。トコロがこのチユニスといふ處はゼノアとは非常に中がわる
く、その上に土地の人は皆回々教の信徒であつて、戦争で耶蘇教國
の人を生捕つた時は、悉く奴隸とする習慣であつた。ユーベルトが
或る豪商の家に行きたるに、一人の年少い耶蘇教徒が奴隸となつ
て、鐵鎖に繋がれて働いて居たが、かよわい身で苦役をして居るこ

と、時々鐵に凭れて歎息し、頬のあたりにはホロリと涙を流した
るを見て、甚だ不便に思ひまして、伊太利語を以て話をしかけまし
たが、かの少年は直ちに故郷の語音を曉りまして、暫く話す中にゼ
ノアの裁判長アドルノの子であることが知れ、ユーベルトは大き
に驚きました。故とぞ知らぬ振をして、そこを立ち去り、彼の少年
を生捕つたる海賊の會の家に見つけ、少年の贖金を問ひますと、
會の申すには、貴族の子と申すことであるから、二千クラウンより
下では離されぬと云ひますから、ユーベルトは其金を拂ひ了つて、
一人の僕を雇ひまして、美服一領を持たせて彼の少年の處に歸つ
て、自分が身受をしたる事を話し、手づから鎖を解いて衣服を着
換させました。少年は只夢のやうな心がして、不思議に堪へずして
居りました。ユーベルトは事の仔細を話して自分の宿につれ返り、
いと懇懇に待遇して居ります。内に間もなく伊太利へ行く船が

ありましたから、少年をゼノアへ送り飯さうと思ひまして、ユーベルトは充分の旅費を與へて申しますには、卿さへよろしいならば、私は何時までも此處に留めたいけれども、卿は一日も早う兩親の許に飯りたいと思ひなされるであらうから、この金を旅費として、故郷に飯り、この手紙を卿の父上に渡して下されと別を告げましたから、少年は叮嚀に禮を述べ、互に手とりかはし、共に涙に咽んで別れました。サテ、アドルノ夫婦は斯る事とは夢にも知らず、定めし船は沈没し、我が子は死んだに相違ないであらうから、よし歸るところがあつても、死骸であらうと思ひ込んで居りましたるに、豈圖んや、忽ち生きて歸りましたから、今までの哀は忽ち消え失せ、夢かとはばかり打ち喜び、互にシカと抱きしめ、暫時言葉もなかつた。稍あつて、少年は海賊の爲めに生捕られて、奴隸となつたことを話しますと、アドルノはシテ何人に救れて歸つて來たかと尋ねますから、仔

細はこの手紙にありますと、差し出したのを披いて始めて、ユーベルトが償金を出して救ひ歸したことがわかり、アドルノは覺えず手紙をとり、落し手を顔にをし、當て、ア、先年あの如くに辱しめたるユーベルトに、斯く救れしかと、暫し慚愧と歡喜とで、感涙に咽び入り、ました少年は猶をも語をついで、ユーベルトより、父母も及びぬ親切慈愛を受けたことを、委しく話しましたから、アドルノは益々感ぜ入り、如何にもしてこの恩を報ぜんものと、ゼノアの貴族達に願ひまして、ユーベルトへの宣告を取消さうと、非常に心配を致しました。が、年月を経るうちに、貴族達の心も自然に解け、まして、遂にアドルノの請願を許されましたから、アドルノは大いに喜び、早速に手紙を認め、ユーベルトに本國にかへり、再びゼノアの市民となることを許されたことを知らせ、并に自分の子が救れたことについて、厚く謝禮を述べ、この後は互に親友の交を結ばんと申し

送りましたから、ユーベルトは再び故郷に歸り市民の尊敬を受け、楽しく餘年を送つたと申す。サテユーベルトは只少年がかよわき身を以て奴隸となつて苦役をして居るのを不便に思ふて、二千クラウンの金を拂つて救ひ、又若干の旅費を與へて父母の手許へ送り歸して遣つたのであつて、初よりその恩返しを當てに致したのではない。是れも只自分ばかり利益を貪る心から見たらば、大きな損に相違ないけれども、ソコが利行は一法なり、普ねく自他を利するなりとの御言葉に違はず、自然にその利益がユーベルトに廻つて來て、追放御免となつて再び本國に歸るやうな幸福を得たのであるから、この因縁を聞いても、高祖大師の御言葉を確信して、人の爲め社會の爲め國家の爲めに利行を勤めるが何よりの肝要。

○参考

○純孝の子の父母を愛敬するが如く、諸の衆生を視ること自己の如し。

(經涅槃)

○菩薩は應に佛性孝順心慈悲心を生じ、常に一切の人を助け福を生じ樂を生ぜしむべし。(經梵網)

○菩薩は一切貧窮の人來り乞ふ者あれば、前人の所須に隨ひ、一切に給與す。(經上)

○若し貧窮の人あり、財の布施すべきなくとも、他の施を修するを見る時、隨喜の心を生ぜば、隨喜の福報は施と等しくして異なることなし。

(經因果)

○佛とは何をいはまの菩薩

慈悲より外にしくものぞなき

(一休禪師)

第二十四節

同事といふは不違なり。自にも不違なり。佗にも不違なり。譬へは人間の如來は人間に同ぜるが如し。佗をして自に同ぜしめて、後に自をして他に同ぜしむる道理あるべし。自他は時に隨ふて無窮なり。海の水を辭せざるは同事なり。是故に能く水聚りて海となるなり。

これは修證儀第二十四節で、四枚の船若の中の第四番目なる同事の御示してある。先づ同事といふことはドウイフことかといふに、同事といふは不違なりと仰せらるゝ。不違の違はタガフ、又はソムクと訓む字である。ソレに不の字があるからタガハヌ又はソムカヌといふことになるが、この「たがはぬ」「そむかぬ」といふことを言ひ換へれば、隨ふといふことである。何に隨ふてゆくであるかといへば外のことではない。今この方より濟度してやらうといふ人の

爲る事作すことを如何なる事でも管はず、その人のする通に隨つて、此方も爲してゆく、これが即ち方便である。彼の觀音菩薩が三十三身を現じて説法し、普く一切衆生を教化なさるゝが、即ちこの同事方便である。サテ此方が濟度しようといふ人の爲すまゝに隨ふて、少しも負かず違はぬやうにしてゆくといふことに就いては、先づ第一に此方が此方に違はぬやうにしてゆくといふことが肝要であるから、自にも不違なり、他にも不違なりと仰せられてある。他人の爲すまゝに隨つて違はぬといふことは、能く分つて居るが、自分に違はぬといふは、ドウかといふに、自分で自分に違はぬのである。即ち自分の本心で善いと思ひこんだ事ばかりを行ふてゆけば、少しも自分に違ふことはない。しかるに多くの人が、さうはゆかぬから、自分の本心ではコレハ悪いと知りながら、本心に違ひ自分に背いて、道ならぬ行義に缺けたことをする。これは私慾に蔽はれて仕

舞ふからである。苟にも人を濟度しようといふほどの者は第一に自分の本心に違ふやうなことはならぬ。自分の本心に違ふやうなことは、他人の爲すまゝ行ふまゝに違はず、その通りに行ふてゆく中に、他人の悪い行に遇ひば、そのまゝ自分もその悪い方に陥つて仕舞ふ。かくては人を濟度するところではない。自分までか墮落して仕舞ふ。それであるから、この自にも不違なりといふことが大切であるのぢや。既に自分で自分に違はぬやうになれば、始めて他にも不違といふことが眞實に行はれる。その同事の例は、譬へば人間の如來は人間に同せるが如し、釋迦牟尼如來も兜率天に在せしを、我々人間を濟度なさらふ爲めに、娑婆往來八千遍もなされ、遂に中天笠は伽毘羅國淨飯大王の御子に御誕生遊ばされ、耶輸多羅といふ御妃を娶り、羅睺羅といふ御子様まで御設けになり、十九にして出家、三十にして成道、八十にして御入滅といふやうに、何も彼

も我々人間と同様になさせられた。それが即ち同事の例である。釋迦牟尼如來は人間の如來であらせられるから、かくの如く一々我々人間と同様になさせられたのであるが、天上の如來は天上に同じ、畜生の如來は畜生に同するとの意味は自らこの御詞の中に含んで居る。それ故に人界に同するをもて知りぬ、同餘界なるべし、同事を知る時、自他一如なりと四攝法の卷に御示しになつてある。しかば地獄の如來は地獄に同じ、餓鬼の如來は餓鬼に同じ、修羅の如來は修羅に同するといふ如く、六道四生到る處皆同事ならぬはなにかやうに參究してゆくのが我宗の心得方である。しかしこれは此方から先方へ同する上のことであるが、同事といふは只此方から先方へ同することばかりでなく、時としては却て先方を此方へ同せしめて、それから此方が先方へ同してゆくこともあるから、佗をして自に同せしめて後に自をして佗に同せしむる道理あるべ

しと仰せらるゝかく此方から先方へ同じ、又先方と此方へ同ぜしむるは、ツマリその時の都合に依つて、ドチラにしてもよろしいのであるから、自佗は時に隨ふて無窮なり」と御示しになつてある。自佗といひ佗といへば、ドコまでも差ふて居るやうに思はれるが、決してそうでない、畢竟自佗圓融の境界に到つてみれば、自他法界平等である、自他平等であるから、其の時に隨つて、どちらを先に致してもよろしいのである。更に例證を引いてみれば、海の水を辭せざるは、同事なり、是故に水聚りて海となるなり。大海といふものは、ドンナ細い流ても厭はず、ドンナ穢い水でも嫌はず、ミシシツピーの様な大河の水でも、橋下の小溜の水でも、少しも擇り嫌ひなく、皆悉く受け容れるから、大海となるのである。諸佛如來が一切衆生を平等に濟度あらせらるゝも、丁度これと同じことであつて、順縁の衆生でも、逆縁の衆生でも、少しも御擇びなく、苟にも縁あるものは悉く

大悲の懐に攝取して御救下さるゝ、これが諸佛の同事であるが、決して諸佛ばかりに預けて置くわけのものではない、既に佛子となつたる上は、皆この通に日用の事が行はれてゆかねばならぬ。鈴木正三といふは、三河の産れて、代々徳川家康に仕へ、幼少より勇名高き人であつたから、家康に従つて諸處の軍に度々手柄をなし、とりわけて關ヶ原の戦には、拔群の功を立たしたことがあるが、その後剃髮して俗名の正三をシヤウサンと改め、諸國に行脚して、禪門の高僧智識に參じて、悟道を開き、後に三河にかへつて石平山恩眞寺といふに住し、その後又江戸に來て、淺草の天徳院の傍に庵を結んで居られた。この人は博學な人であつたから、種々の書物も出來て居るが、人を教化するに善巧方便を用ひて、度々多くの人を濟度せられた。或る時一人の武士が來て、頻りに辻斬の自慢話をして、正三に勧めた。スルト正三は固より辻斬などする人ではなく、又よくないこ

とを知つて居られるけれども、直に辻斬はよろしくないことであるから止めるがよいと諭しても、思ひ止まるべき様子のないのを見て取つて、故とイヤその辻斬は面白ものである、自分も若年の時は中々好いて居つて頻に働いたものであるが、今は老年になつたから、若かい時ほどにゆくまいけれども、覺えのある腕を試めしみると云はれると、彼の武士は、先生もよもや辻斬は出来すまいと嘲るやうに言ふから、然らば共に行かうといふので、日の暮れるを待つて品川の邊に行きて、彼處此處とさまよう中、町人百姓婦人小兒などの澤山通り過ぎるを、彼の武士は之を斬らうと致すから、正三はその度毎に之を止めて居ました、やがて多くの從者を連れて通る者があるを見て、正三、彼を斬り給へ、サー早く斬り給へと催しましたれば、彼の武士急に惑ふて、ドキマギいたして居る、ソコデ正三、イヤ貴殿が彼を斬ることが出来ずば、某貴殿を斬らうといへ

は、武士は慄ひ恐れて頻りに助けて下されと云ふたから、正三、かやうな者を斬るこそ武士なれ、女子兒を斬つたどて何の役に立つかと、非常に叱つて將來を誡めましたから、武士も大いに後悔して、その後にはフツツリと辻斬を止めたと申すことである。コレは自をして他に同ぜしめて後に他をして自に同ぜしめたといふものである。兎に角、何れを先にしても、ツマリ人を濟度する上に於いては、相手を擇ばず都合のよい手段を執つて、人を利益してゆくのが、同事の方便と申すものである。ソコデその人の身分によつて一様にはゆかぬことではあるが、この自他圓融無碍の同事といふことが、スツカリ會得せられてあつたならば、その時と場合に應じて適宜の方法が行はれるに相違ない。吳々もこの四枚の般若即ち布施愛語、利行同事を心懸けて、朝な夕なの上に怠らす實行せられるのが肝要。

○參考

○菩薩は唯大悲を以て方便して即ち諸の世間に入り未悟を開發す。乃至種々の形相を示現し逆順の境界其れと同化して成佛せしむ。(圓覺經)

○若し人真如を念ずと雖も方便を以て種々修習せざれば亦淨なることを得るなし。(釋摩訶)

○彼の嬰兒啼哭の時父母即ち楊樹黃葉を以て之れに語りて言く啼く莫れ啼く莫れ我れ汝に金を與へんと嬰兒見已つて眞金の想を生じて便ち止めて啼かず然れども是れ楊葉にして實に金に非るが如し。

(大經)

○海は水を辭せざるが故に能く其の大を成し山は土を辭せざるが故に能く其の高を成し明主は人を厭はず故に能く其の衆を成す。(管子)

○明主は人を厭はざるが故に其衆を成す人を厭はずと雖も賞罰なきには非ず賞罰ありと雖も人を厭ふとなし。(正法藏)

○三十餘り三つのうみ船さす棹の

ひまやなからん慈眼視衆生

(行誡上人)



第二十五節

大凡菩提心の行願には、是の如くの道理、靜かに思惟すべし。卒爾にすること勿れ。濟度攝受に一切衆生皆化を被ふらん功德を禮拜恭敬すべし。

これは修證義第二十五節でありまして、第四章即ち發願利生の結文でありますから、第十八節以下に御示しになつたところを、この一節で結び止めてあります。御文の意味は至つてよく分つて居つて、別に複演するほどでもないやうでありますけれども、これまで例によつて一通御話を致しませう。大凡菩提心を發して衆生を濟度しようといふ誓願を立て、それを實地に行ふてゆく上に於いて、上に陳べた通り即ち十八節より廿四節までに示した通の道理があるから、その深長の道理をば心を靜めて能く考ふべきことであつて、決して輕卒に心得て、折角諸佛の位に仲間入をした

最勝の身を徒にしてはならぬとの御教訓である。既に三世諸佛の戒法を受け、諸佛の仲間入を致した上からは、大海が百川を引き容れるが如く、一切衆生を攝取し濟度せねばならぬ。そうしてやれば、その化益を受けるところの一切衆生は無上の安樂を受ける。しかし一切衆生に化益を與へたからとて、それを以て自分の身に功德を積むから、自分の利益にならうなどと思ふてはならぬ。只此方の化益によつて、一切衆生が妙樂を得れば、それがこの上もない功德であると思ひ、どうぞして一切衆生が悉く化益を蒙つて漏れぬ様と心掛けて、功德を積み累ねることを、自分の行願として禮拜恭敬し、嗚呼難有いと思はねばならぬ。世間の救ても、多くの人に慈悲仁愛をかけ、あらゆる人に惠を與ふることは、最も善い事として之を勸めぬことはないが、それは皆有所得の心と申して、こうして遣れば、そのよい報は自身に廻り來て、自身の爲になると、かう思ふて慈善

をするのであるけれども今佛祖正傳の戒法を受けて佛祖の仲間
入を致した身は只一切衆生が化益を蒙る功德を難有思ふて禮拜
恭敬すべきであるこの一切衆生皆化を被らん功德を禮拜恭敬す
べしとある御示しが此の發願利生の肝要であり又他教では云は
ぬところであつて最も大切に心を留めて了解致して置かねばな
らぬ事でありませぬこの一句が眞實に心に合點がゆかぬときは折
角の利生も皆無駄事となつて仕舞ますからシミと御了解に
なつて置かねばなりませぬ英吉利の素封家ジョン・ホーウアード
と云ふ人は非常な慈善家であつたこの人の少い時嘗てリスボン
に赴く航海中で佛蘭西人の爲めに捕れて同船の人々と共に佛蘭
西のプレストといふ半屋に入られ石の牀に起き臥しすること
四五日間にして殆ど餓死せんとする位であつたが此時に自ら因
難を嘗め又人の困難を見てソクソクと感ぜられて本國に歸つて

後自ら政府に建白を致されたから遂に佛蘭西人が英國の囚徒を
親切に取扱ふ様になつたその後五六年間はカーデントンの自分
の邸に居つて近隣地方の慈善事業に従事したり又實直にしてよ
く働く細民を人数を限つて自分の所有地の内に住居させて自ら
その者等の職業を監督し或は慈善學校を設けて細民の小供を教
育し或は自分の生計を質素にして年中の収入の内より莫大なる
金錢を貧民に施したりなどして居られた切當時各地の監獄は實
に非常なる慘酷なる有様であつたから病氣に罹る者が多く其の
他の弊害も甚しかつたから一千七百七十三年遂に自ら英國監獄
の改良を致さうと決心し先づ近隣の監獄より手を下し次第に遠
方の監獄の状況を探り時々インクランドスコットランドアイル
ランドの諸大監獄を巡回視察せられたが自分で直ちに此の状況
を政府に具狀する権利が有つたから英國の國會に向つて囚徒に

課する罰金を減ずる事と、囚徒の衛生に注意する事の二ヶ條の條
 例を提出し、國會の議決を得られた。斯くて大いに自國の監獄の改
 良を成し遂げられたから、更に海外諸國に及さうと思ひ、一千七百七
 十五年に歐羅巴大陸の旅行を始め、其後十六年間、死ぬるまで監獄
 衛生の改良等の慈善事業にかゝつて居られた。さて歐洲各國の監
 獄を巡覽せらるゝや、至る處の政府に建白して改良を計り、又自分
 は極めて節儉を守り、収入の剩餘は悉く貧民救助に費し、そうして
 旅行中も絶えず自分が見たり聞いたりした所を書いて世間に知
 らせられたから、ホウアード一人の慈善によつて、世間多くの人々
 を益せられたのみならず、世界各國の監獄制度の改良に益を與へ
 たことは非常なものであつた。かくて一千七百八十四年に至るま
 てに、ホウアードが自から監獄改良の爲めに世界各國を旅行せら
 れた里程は、四万二千哩以上にして、殆ど全地球を三度廻つたほど

の里程であるといふ。其の辛勞は實に思ひ遣るゝ次第であります
 が、その中でも感ずべき事は、避病院の改良に就いての苦心であり
 ます。嘗て地中海近傍の地方で、疫病が非常に流行したことが有つ
 た、この邊に一個の避病院があつて、疫病の流行する地方から來た
 船より上陸する人は、一時悉くこの避病院に入れることであつた。
 これは其の上陸をした人が疫病を傳染して居るか居らぬかとい
 ふことを調べる爲めてはありますけれども、その入院の期限が甚
 だ長くして、その上に入院者の待遇が慘酷であつて、殆ど囚徒の如
 き有様であつたのだからして、疫病の豫防とならずして、却つてそ
 れが爲めに病を發し、甚しきは遂に死ぬるといふやうな有様であ
 つた。ホウアードは此事を聞いて、自分で親しくこの避病院を實見
 しようと思ひましたが、かゝる危い處に猥りに人を連れゆくは善
 くない事であるといつて、僕をもつれず只一人て出立し、佛蘭西の

南の方より伊太利を経て、マルダザンダシミルナ及びコンスタ
チノブルに至り、それより又シミルナに還りました。それはシミル
ナに於て當時疫病が流行することを知り、其處で傳染病狀と云つ
て、此者は傳染病の土地に居た者であるといふことを書た書附を
得て、それを持つてヴェニスに赴き、定期の間彼の避病院に入り、自
ら親しく辛苦を嘗め、病院中の規則を實見する爲めであつた。しか
るにシミルナに赴く海上にて、黒奴の海賊に出逢ひ、非常の勇氣を
奮ふて闘つて、辛ふじて危難を免れて、ヴェニスに着き、大に喜び勇
んで彼の病院に入り、定期四十日の滯留中、身命を抛つて入院者取
扱の改良に力を竭くされたから、制度の上就職して大に得るとこ
ろが有つたといふ。當時日耳曼皇帝はこれを聞き給ひ、一方ならず
ホウアードの慈善事業を御賞讃あつて、ホウアードの歸途ヴェン
ナを通行の際特に謁見を仰せつけられ、且ヴェンナの街にホウア

ードの肖像を建てたいとの思召にて、市民に寄附金を仰せつけら
れた。こういふ有様であつたから、ホウアードと同じやうなる慈善
家の熱心なる盡力により、到る處にかやうな企が起つて、ホウアリ
ドの名が各國に轟き渡つた。其後一千八百七十九年に最後の巡回
を致し、日耳曼を経て魯西亞のセントピータスホルク及びモスコ
ウに赴きました。が、到る處の監獄病院でホウアードを禮遇するこ
と、丁度各國の監獄病院の巡察官のやうであつたが、黒海地方の魯
西亞の新植民地を巡回中、當時「マリクナント」といふ悪病の流行し
て居るチャーンソンといふ處に暫く滯留中に、此傳染病に罹つた一
人の若い婦人が治療が受けたいから來てくれとの依頼によつて、
之を救ふてやりたいとの念より、かの婦人の處に赴きました。が、遂
にその婦人より悪病を傳染して死なれました。から、チャーンソンの
近傍に葬られた。その後五六年立つてから、アレキサンダー皇帝が

ホウアードの爲めに其處に紀念碑を御建てになりました。ホウアードの斯る熱心なる慈善事業といふものは決して自分の利益とか名譽とかいふやふな考で出来るものではない、他人の難儀を救ふて遣り他人に利益を與へるのが眞實心の底から嬉しく楽しいといふ考からなうては出来ぬ。しかし世間の人々に皆残らずこのホウアードの通りに行へと云ふたところで決して爲るものでもない、又實際出来るものでもないが、佛とも法とも知らぬホウアードでさへも、仁慈の心が厚くしてかやうな事業を成したとしてみれば、佛祖の仲間入をして居る身の上であらば、たとひその行が直接に慈善の業でなくとも、この心即ち一切衆生皆化を被らん功德を禮拜恭敬する心を起して、朝な夕なの勤めが出来ぬ筈はないから、能く心を静めて高祖大師の御教訓を守らるゝやう。

○參考

- この發心よりのち、大地を擧ぐればみた黄金となり、大海をかけば忽ちに甘露となる。(正眼法)
- 毎に自ら此念を作す、何を以てか衆生をして無上道に入り、速に佛身を成就することを得せしめんと、これすなはち如來の壽量なり。(上全)
- 自未得度先度他の心をおこせる力によりて、われ佛にならんとおもふべからず。(上全)



第二十六節

此發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなり。今是の如くの因縁あり願生此娑婆國土し來れり。見釋迦牟尼佛を喜はざらんや。

これは修證義第二十六節であつて、全篇第五章に當る即ち四大原則の中の第四番目の行持報恩の章であります。これまで毎度申す通り吾人本來具有の常住佛性の上に於いては上下貴賤等の二様はないけれども差別門の上に於いては上に對しては孝順心と云ひ下に向つては慈悲心と云ふその下より上に對する孝順心を報恩と名けその報恩といふは行持の外はないのである。行持といふ語は「華嚴經」の中に佛の十一の持といふことを説かせられた。其中の一であつてそれを解釋してもあるけれども、今はそのやうな分り難いことは暫く措いて極平たく云へば勤行すなはち行と

いふほどのことである。諸佛も衆生も常住佛性の上からは少しも違ひないが、この前にも申した通り既に已成の佛當成の佛といふ差別がある上からは上諸佛に對する心得と下衆生に對する心得が無くしてはならぬ。ソデ前の發願利生は諸佛から衆生に對する利益の行持この行持報恩は衆生から諸佛に對する報謝の發願の上下に對する發願行持が並び行はれて始めて常住佛性の本體は全く顯はれるといふものである。サテ法界は廣くとも三世諸佛は多くとも我々が大神教主と憑み奉るは釋迦牟尼如來である。それは我々は現に釋迦牟尼如來より嫡々相傳の戒法を受けた身の上であるからこの外に大神教主とする御方はない。然るにその釋迦牟尼如來は世界も多きその中にこの娑婆世界娑婆世界に國土も多きその中にこの南閻浮に御出現あそばされた南閻浮といふは天竺の天文説に須彌山といふを中央として其四方に在る多

の國々を總稱して四洲といふ即ち東弗婆提西瞿陀尼北拘盧南閻浮の四つである天竺支那日本等はみな須彌山より指すとさば南に當るからこれ等を總稱して南閻浮と申す一躰閻浮といふは梵語であつて種々の説もあるが矢張五種不翻の一つで古から梵語のまゝにしてある位であるからさまで深い穿鑿をせずとも只須彌山の南方に當る總べての國の總名と心得て居ればよい娑婆といふことも序に申して置かうこれも梵語で譯すると堪忍土といふことになる即ち一つの世界の名で三千大千世界がこの中に含んで居るこの世界に生れた者は貪欲瞋恚愚癡の三毒その外諸種の煩惱の苦を堪忍しこれらの煩惱より起る諸種の惡を堪忍せねばならぬから堪忍土と云ふたのじやかく娑婆は廣く國土も多い中にて須彌山の東方や西方や北方の國々の衆生は澤山なれども種々の事情よりしてどうしても菩提心を起す者が少ないが只こ

の南閻浮即ち只今の地理で申す亞細亞の人間が發心し易い衆生といはずして人身とあるは衆生といへば天上人間修羅畜生餓鬼地獄の六道卵胎濕化の四生をもその中であるが外の衆生は容易に發心が出來難いしかるに只人間界は菩提心を起し易いから此發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなりと仰せるゝそれから今是の如くの因縁あり願生此娑婆國土し來れりといふは我々御互は前世よりして此娑婆に生れたいといふ願望があり前世の因縁によつて今世にこの娑婆に生れて來たのであるこの娑婆に生れて來たればこそ釋迦牟尼佛も見奉ることが出來たのぢやしかれば之を難有思はんでならぬから見釋迦牟尼佛を喜ばざらんやと御示し下されたのである釋迦牟尼如來は三千年以前に御入滅遊されて今日は末世には相違ないけれども釋迦牟尼如來より嬌々相承あつたる如來の法身即ち常住佛性の戒體を發得す

ることか出来てみればとりもなほさず釋迦牟尼如來を拜むたの
ぢや法界は無盡衆生は無邊であつて一切衆生の中に三世諸佛は
各々の御教化の國土を異にせられ東方琉璃光世界は樂師如來西
方極樂世界は阿彌陀如來といふやうに別々に化土を受持遊さる
る中に釋迦牟尼如來はこの娑婆世界を化土に受持遊されたその
娑婆世界といふ中に三千大千世界といふて多くの國土があるが
その各々の國土に生るゝ衆生は固より無量無數である然るに我
々御互は現に釋迦牟尼如來が御出現あらせられた南閻浮の中に
人身と生れ釋迦牟尼如來を拜むことが出来たといふは過去世よ
り一方ならぬ因縁であると思はねばならぬしかるにこの難有喜
を得たのは畢竟誰れの御蔭であるといへば勿論我々御互が宿殖
善根の因縁に相違ないけれども我が日本曹洞宗の高祖たる承陽
大師それについて孤雲禪師徹通禪師及び太祖圓明國師等の精

々御相承があつたればこそ末世の今日に生れ來ながらかゝる難
遇希有の法樂を受けることが出来たのぢやとすれば見釋迦牟尼
佛を喜ぶと共に高祖太祖の御教訓を難有思ひ別に他方世界の極
樂などを願はぬのみか高祖太祖の御跡を慕ひ生々世々我が日本
帝國に生れこの日本帝國を利生の國土と定めさてその上に十方
世界にまで流通を計るといふ心得が無くてはならぬしかるに佛
教信者と稱せらるゝ身でありながら動もすれば少しばかりの世
間の變に出遇ふて身も心も轉倒してとんでもない淫福邪教に無
理なる祈願などをして益々不幸を重ねる者があるは畢竟この見
釋迦牟尼佛を喜ばざらんやとある御示の意が眞實合點がゆかず
心の底から難有嬉しいといふ觀念が無いからのことである東京
市日本橋區久松町廿番地の田川トク子といふは元來家は天台宗
の檀家であるけれども因縁あつて篤く眞宗に歸依し煩る佛願の

尊きを喜びつゝあつたが、去る明治廿二年三月に、不圖俗に云ふ乳癌の病に罹り、始のほどは差したることゝなかつたが、追々重症となり、其年の五月三日に佐藤病院に入つて治療を受けることになつた。全肺乳癌といふは、婦人に取つては實に大患であつて、大概十中の八九は全快覺束ないほどの難病であるから、本人も充分その覺悟を定め、入院の際は親戚縁者の人々にも、それぞれ死後の事迄遺言をして入院した。しかるに此に感ずべきは、胸部を切斷する當日、國手が魔睡劑を用よしたならば、トク子は命は醫者にまかせ、心は彌陀にまかせた身であるから、今更魔睡劑を用ひるには及ばぬと言つて、遂に之を用ひず、大切斷中少しも動ぜず、絶えず念佛を稱へて居たから、佐藤國手も、五十有餘の老婦にて、かくまで精神の確かなるには、大に感ぜられ、猶ほ眞宗の僧侶中にも、全國眞宗八百萬の信徒中、かく堅固なる信者は果して幾人あらうか、惠燈大師が、國

に一人郡に一人と云はれた、その一人であらうと稱讚したと申す。かくてトク子は終に治療を仕遂げて全快の上、其月の廿六日退院したが、是れ全く佛祖の加被力と深く喜びの餘り、翌月廿四日が橋町眞宗説教所女人講の當日なるにより、一席の説教を請ひ、全快の祝として會員一同に盃一個と扇子に、五月三日病の爲めに入院して六月廿六日全く快く退院なしたるも、日頃信じ奉る御佛の御恵とかたじけなく思ひつゝ、けてと前書して、ありがたやいなながらへて世の中にまたもみのりをきくぞ嬉しきといふ自作の歌一首を書いて配つたといふ。宗派こそ違へ、如來様を難有思ひ、見佛を喜ぶといふ點は同じことである。未來他土の往生を願ふ信徒すら是の通りであれば、況して今世に於て此身此儘常住佛性の戒體を發得させて下された釋迦牟尼佛を拜み、高祖大祖を拜み奉る御恩のほどを喜び難有思はずして濟むべきや。

○参考

- 何んが娑婆と名くるや此諸の衆生三毒及び諸の煩惱を忍受し能く斯の悪を忍ぶが故に忍土と名く(經華)
- 佛法に値ひ奉ること無量劫にも難し人身を得ることまた難し設ひ人身を受くと雖も三洲の人身好し其中に南洲の人身勝れたり見佛聞法出家得道するゆえなり(正法眼藏)
- 見佛は被佛現成なりたとひ自己は覆藏せんことをおもふとも見佛さきだちて漏洩せしむるなり(正法眼藏)
- 爾時に世尊諸の比丘に告げのたまふ若し衆生にして返復を知ると言ふ者は此人敬ふべし小恩尙忘れず何に況んや大恩をや設令此間を離るゝ千由旬百千由旬なりとも故らに遠しとせず猶我に近うして異ならず(捨一經)
- 恩を知るは大悲の本善業を開く初門人の愛敬する所名譽遠く聞

え死して天に生ずることを得終に佛道を成ず恩を知らざる者は畜生より甚しきなり(論度)

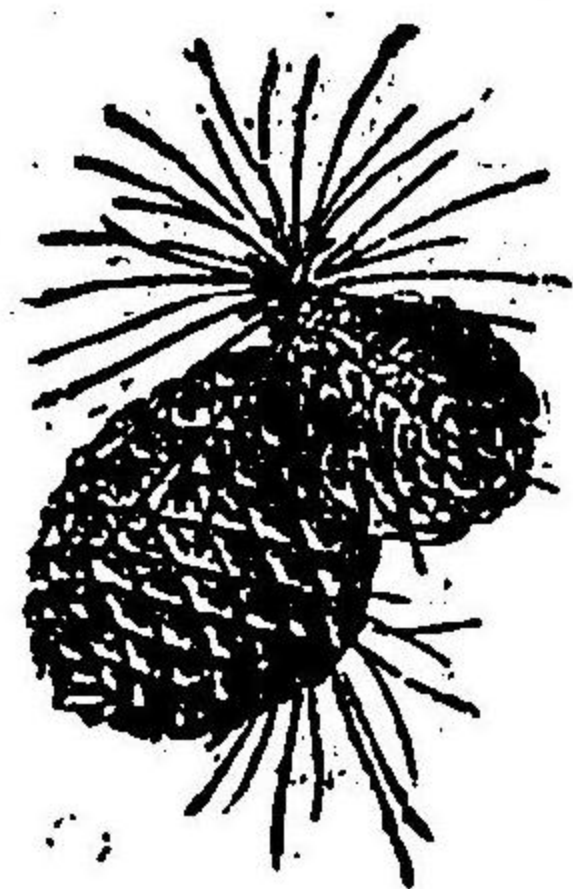
○のりのためつみける花をかざくに

(蓮子内親王)

○むかしおもふまがきの花をつゆながら

(兼好法師)

手折りていまも手向つるかな



第二十七節

靜かに憶ふべし、正法世に流布せざらん時は、身命を正法の爲めに抛捨せんことを願ふとも値ふべからず、正法に逢ふ今日の吾等を願ふべし。見ずや佛の言まはく、無上菩提と演説する師に値はんには、種姓を觀ずること莫れ、非を嫌ふこと莫れ、行を考ふること莫れ、但般若を尊重するが故に、日々三時に禮拜し恭敬して、更に患腦の心を生ぜしむること莫かれと。

これは修證義第廿七節で、前の見釋迦牟尼佛を喜ばざらんやといふを承けて、何故に喜ぶべきであるかといふ理由を示して、大法に對する報恩感謝の念を起さしめくださるのである。吾々御互は幸に南閻浮の人身と生れ來て、佛祖正傳の大法を相續することが出來たのであるが、若し不幸にして南閻浮に生れ來ても、佛祖正傳

の大法が世に弘まつて居なかつたならば、即ち釋迦牟尼如來が御出世の前であるとか、又佛法が最早破滅して仕舞た後であるとか、いふ時に生れ合せたならば、イカほど自分の身命を捨てても、大法の爲めに盡くしたいと思ふても、遂に大法に値ふことは出來ぬ次第である。こゝを能く考へてみよとの思召で、靜に憶ふべし、正法世に流布せざらん時は、身命を正法の爲めに抛捨せんことを願ふとも値ふべからずと仰せらるゝ身命を抛つて法の爲めに盡くしたいと思ふても、正法の弘通して居ない時代に生れ合せたらば詮ないことである。と考へてみれば、吾々御互は因縁あつて正法流布の時代に生れ合せ、佛祖正傳の戒法を受け、斯く易々と佛祖の仲間入を致したの何んたる難有仕合ぞと、シミク喜ばんてはならず、又自分て難有いと喜ぶと同時に、他人にも我々と同様に正法に値はせてやりたいものと願はねばならぬ。そこを正法に逢ふ今日の吾等

を願ふべしと御教訓あらせらる。既に遇ひ難き佛法に遇ふとを
難有く喜ぶ上は、その正法を説く師匠に對しては、その心得もある
べきであるから、これから佛の御言葉を引いて正法演説の師に事
へる心得方を御示しになる見ずや佛の言はくとは高祖大師が下
の如く佛が御示しになつて居るぞよと仰せらるゝ御詞である。無
上菩提を演説する師に値はんにはといふより更に患惱の心を生
ぜしむること莫れといふまでは佛の御言葉である。その御言葉の
主意は若し無上菩提といふて、此の上もない難有菩提の大法を演
説する御方に遇ふたら、決してその大法を御話し下さるゝ御方の
身分を論ずるなどの御示しぢや。種姓といふは、天然には四姓とい
ふて、波羅門、刹帝利、毘舍、首陀と稱する四通の人民の階級がある。丁
度日本の古代の源平藤橘の四姓、徳川幕府時代の士農工商の階級
のやうなものである。そのほかに旃陀羅といふて日本の昔の穉多

のやうな一階があつて身分の高い者は低い者を牛馬犬猫同様に
扱ふ風があつた。その嚴しいことは中々幕府時代の武士が百姓町
人や穉多を取扱ふた位でなく、實に恐しいことであつた。それ
かるに釋迦如来は特に人權を重ぜられ、法界平等といふ主義を以
てこの種族階級といふものを排除せられ、「増一阿含經」にも、四河海
に入つて復本名なく、四姓出家して同じく釋氏と稱せよとも御示
しになつて居つて決して種族や氏姓を彼是と論じてはならぬと
深く御戒めなされた。容顏といふは顔貌や形容である。自分の師匠
と憑んで大法を聴くに決して師匠の顔貌や形容を論ずること
はない。随分目の見えぬ人や跛者でもエライ方があるから決して外
貌の善惡を辨ふに及ばぬ。非を嫌ふこと勿れ行を考ふること勿れ
といふは、外貌と違ふて多くの人が直に目を付けることである。不
品行な僧侶の演説を聴いては有り難くないとか、彼の人には博學で

はあるけれども酒を飲むとか高慢であるとか、なんとかかんとか
と、その人の缺點ばかりを許さ立てやうとするが、凡夫の常情であ
るが、これも大きな間違である。此方に於ては何にも其の人の缺點
を取るのではなく、只其人の説くところの法さへ聽けばよいのであ
るから、その外のことには口ウてもよい。此方は只法が目的であつて
その人が目的ではないから、決してそんな事に貪着せぬがよい。例
へば買物をするに賣手のことを彼是と論ずるやうなもので、店の
主人から買うが番頭から買うが、又は丁稚から買うが、買う所の品
物さへよければ誰れても構ふことはない筈である。しかるにイヤ
丁稚などは品物はよくても買はぬ番頭ならば品物は少し悪くて
も買うと云ふ者があつたらば、その人は馬鹿といふより外はない。
此方では品物が目的であれば、賣手が誰れてあらうとも、彼れてあ
らうとも、そんな事を構ふには及ばぬ。三世諸佛の説き給ひたる大

法を説くのであつて、決して其説く人の發明でない。ツマリ諸佛の
妙法を取次するだけの事であつて、みれば取次人は誰れてもよい
筈ぢや、それ故に、但般若を尊重するが故に、日々三時に禮拜し恭敬
して、更に患惱の心を生ぜしむると勿れと、御教訓になつてある。假
若は梵語で翻譯すれば、佛の大智慧といふことになるが、此處では
只佛法と心得ればよい。此方では説く人即ち取次人を論ずるに及
ばず、只その説からるゝ大法を尊び重するのであるが、その説く
ところの師匠に對して、毎日朝と晝と晩と三度は必ず禮拜恭敬し
て、決して此方に對して説法するのをイヤに思ふやうな心を起さ
してはならぬと、師匠に事へる心得方をいと丁寧に御説し下され
たのぢや、實に師匠に事へるには、此通にあらねばならぬ。それ故昔
しから祖師方がその御師匠様に事へられた有様を見ても、中々叮
重なものである。支那の六祖大鑑禪師は、五祖弘忍禪師の處にて、六

少月の間米搗までなされ南嶽禪師は前後十六年間も六祖に御事
へなされれた我が日本曹洞宗の第二祖孤雲禪師が高祖大師に御事
へになつたことは實に古今に比類ないと申すことぢや大本山永
平寺の後席を御つぎになつてから十五年の間方丈の傍に高祖大
師の御影を掛けて三時に禮拜恭敬し生々世々御側に事へたいと
御願なされ自分が遷化したならば高祖大師の御墓の側に遺骨を
收めて別に塔を建ててに及ばぬ又自分の爲めに別に佛事等を
せらるゝことを恐れて高祖大師八日の御佛事の中の一日の回向
に預りたいと御願になつて居たが果して八月廿四日に御遷化に
なつたから御存生中の御願の通り八日の中一日は孤雲禪師の佛
事をせらるゝことになつたかやうな次第であつたからその高祖
大師御存生中に御事へなされたとの叮嚀であつたとは推し量ら
れるまた支那の趙州の眞際大師は六十の年より行脚せられたが

その發足の時たどひ七歳なりとも我に勝れてあつたらばその人
に法を問ふべくたどひ百歳なりとも我に劣りたらんには我彼を
殺ふべしと誓を立て諸方に遍參せられて遂に高僧となられ
開禪師は末山といふ比丘尼を師匠として三年もそれに隨身結
して大に悟を爾かれたといふしからは佛法を説く人であつた
らば男女老少を論ずべきでない昔し釋迦如來御入滅後百年が
り經つて天竺に出世せられた阿育大王といふは非常に三寶に
歸依なされた方であつて常に大齋會を設けて夥の僧侶を供養な
されたがその大會の時ば朝から旛檀香鬱金香などの名香を以
て製した湯に入つて御身を清め給ひ新しい衣裳を着先づ高樓に
上つて四方を拜しそれから頭を地にうけて多くの僧達を禮拜恭
敬せられたしかるに一日夜者といふ臣下がその様を見て大玉に
申し上るには萬乘の玉位に在る尊き御膝を以て卑しき僧共に頭

を下げて禮拜あそばさるゝは如何にもあるまじき事と存じます
とかやうに申し上げたスルト大王は諸の臣下に申し付けて猫犬
虎さては牛馬などの頭まで取集めさせ、それを餘の臣下に持たせ、
彼の夜奢といふ臣下には人の頭を持たせて、いづれも市へ出てそ
れを賣つて来いと仰せられたから、各の臣下手々にその頭を携げ
て出て来ましたが、猫や犬や牛馬等の頭は、それぞれ用方のあるもの
だから、暫時の間に賣れて仕舞ました。しかるに人の頭は誰れも買
者が無いのみか、携げて居る夜奢を見て笑ふやうな始末でありま
すから、夜奢は己むを得ず、歸つて来て外の者が賣りに出ました猫
犬牛馬などの頭は悉く賣れましたが、私の持つて出ました人の頭
は買う者が御座いませぬから、空しく持ち飯りましたと申し上げ
ると、大王しからは買人が無ければ、價を取らするほどに、唯人に施
し與へて来いと仰せられた。ソコ夜奢は翌日再び市へ出て價を

取らずに唯與ふと云ふたけれども、誰も買うといふ者がなく、互に
指して笑つて居るから、致方なく又も空しく持ち飯つて、唯與ふと
申しても、誰れも買人が御座いませぬと申し上げましたスルト大
王如何に夜奢萬物の中で人ほど貴いものないと申すてはないか、
しかるにその人の頭ばかり賣れぬとはドウいふものぞと御尋ね
になつたから、夜奢が答へて、されば人と申すものは生きて居る間は
貴うござりますれども、死ました日には甚だ穢いもので、御座いま
すと申上ました。しからは此阿育王が頭も死んだ日にはそれと同
じことであらふが、と重ねて御尋ねになりましたから、如何にも御
意の通に御座ひます。縦ひ大王の御頭たりとも命終らせられた日
には、買人のあるものでは御座いませぬと申し上げた。その時大王
席を打つて、コレ、夜奢よ、しかれば吾この頭でも死ねば必ず卑
しめられ、犬猫の頭にも劣るものなれば、それを下げて衆僧を拜し

敬ふたとて何の不思議があらうぞと仰せられたれば夜寐は之を
開いて忽ち後悔し今までの邪心を翻して正法に歸し三寶を恭敬
致したといふことが『附法藏經』に見えてある何程位が高ふうても
死ねば鳥獸より劣たものは人間の身ぢやそれを何ぞや己が身を
位取つて頭をさげて禮拜するを其身の耻にもなる様に思ふは甚
だ愚痴の至であるまして無上の大法を説く人に對しては如何は
ぞ敬禮を盡くしても差支はないほどに釋迦如來や高祖大師の洪
思を難有思ひ朝夕報恩の禮拜恭敬を怠らぬやう。

● 参 考

○たとひ諸佛なりともたとひ野干なりとも鬼神なりとも男女なりと
も大法を保任し吾體を如得せるあらば身心を牀座にして無量劫に
も奉事するなり身心は得ることやすし世界に稻麻竹葦の如し法は

あふことまれなり(正眼法)
○無上菩提のため何ぞ得法のうやまふべきを敬はざらんこれ法を重
んずる志深く法を求むる志あまねからざる故なりさて正法をむさ
ぼるとき女人の寶にてあれば得べからずともはず法を求めんと
する時はこの志にはすぐるべし(正眼法)

○いふならく奈落の底に入りぬれば (よみ人知らず)

利利も首陀もかはらざりけり (行誡上人)

○法の爲め身をば薪になしてこそ
き悉ても消えぬ烟なりけれ

第二十八節

今の見佛聞法は、佛祖面々の行持より來れる慈恩なり。佛祖若し單傳せずば、奈何にしてか今日に至らん。一句の恩尙ほ報謝すべし、一法の恩尙ほ報謝すべし、況や正法眼藏無上大法の大神、これを報謝せざらんや。病雀尙ほ恩を忘れず、三府の環よく報謝あり。窮龜尙ほ恩を忘れず、餘不の印よく報謝あり。畜類なほ恩を報ず、人類争てか恩を知らざらん。

これは修證義第二十八節で、報恩謝徳の肝要なることを御示し下されたのである。我々御互ひが今かやうに釋迦牟尼佛を拜み奉り、釋迦牟尼佛の説き給ひたる大法を聴聞し、受戒入位のみとなり得たのは、全く歴代佛祖方の御蔭である。即ち釋迦牟尼佛如來より迦葉尊者、迦葉尊者より阿難尊者と嫡々相承して、二十八代達磨大師大

師より又二十三代を経て高祖承陽大師に至り、大師より四代を経て太祖圓明國師に傳はり、それから段々と相傳して今日に至るまで、皆直々に無上の大道を傳へられた。若し歴代の佛々祖々方がこの無上の大道を自ら行持してこれを單傳し給はなかつたならば、どうして末世の我々御互ひが今日の見佛聞法を得ることが出來やうぞ。實に歴代佛祖の行持によつて、我々が授戒入位の身となることが出來たのである。その御恩の廣大なることは譬へやうも無いこととちや、そこを今の見佛聞法は、佛祖面々の行持より來れる慈恩なり、佛祖若し單傳せずば、奈何にしてか今日に至らんと仰せらるゝ。一句の恩尙ほ報謝すべし、一法の恩尙ほ報謝すべしといふは、たとひ一言半句の法門を聴聞しても、現世は申すまでもなく、未來永劫の利益となるのであるから、その功德實に廣大である。釋迦如來が因地の御修業の時、雪山の谷の底で羅刹の鬼が諸行無常是生

滅法といふ二句を唱へるを御聞になつて、その次の二句を聞かして呉れと仰せられたら、羅刹が久しく人間の生肉を食ふたことがないから、腹が飢いて唱へることが出来ぬと申したによつて、然らば己れが身を遣るから教へよと仰せられた。ソコで羅刹が大きに喜んで、生滅々已寂滅爲樂の二句を唱ひたから、それを聞き了て直に羅刹の口の中に身を投げ入れ給ひたと云ふことぢや、さすればたとひ一句一偈でも、その恩徳を報謝すべきである。まして今我々御互は佛祖單傳の正法眼藏無上の大法を受けたのであるから、これをどうして報ぜずに居られうぞ。正法眼藏といふは、昔釋迦如來が迦葉尊者を第一祖として、大法を御相傳なされるとき、我れに正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり、摩訶迦葉に附屬すと仰せられた。それから歴代の祖師方が、皆この正法眼藏を御傳へになつたのであるが、ツマリ佛法の一番正しい眼目と申すことであつ

て即ち我々御互が受け得た佛戒が、矢張この正法眼藏無上大法である。しからばこの大恩をば報ひずには居られぬとの思召にて、况や正法眼藏無上大法の大恩、これを報ぜざらんやと御示しになつてある。病雀尙ほ恩を忘れず、三府の環よく報謝あり、窮龜尙ほ恩を忘れず、餘不の印よく報謝ありとは、前の第二十三節にあつた話であるが、病雀とは彼の九歳になる楊寶が華陰山で、鷓鴣といふ強い鳥に搏たれて樹の下に墜ち、蟻に責められて苦んで居たのを拾ふて来て、種々介抱をいたして、本の通に達者になつてから放して遣りました。スルト其夜楊寶が寢て居る枕下に、黄色の衣裳を着た童子が現れて、私は先達てから御介抱を蒙つた雀であります。貴君の御慈情によつて、危い命を助かりまして、誠に難有存じます。これは聊か御禮の印として、さし上げますと、白い玉の環を四つ、楊寶に渡して、貴君の子孫の潔白なること、此玉の如く、又その子孫が三公

の位に登らるゝことも、此環の數の通でありませうと云ひ置いて
 去つたそつであつたが、其後果して楊寶の子楊震、楊震の子楊秉、楊
 秉の子楊賜、楊賜の子楊彪と四代續いて三公の位に上つたといふ。
 窮龜といふは、矢張第二十三節にあつた話で、晋の孔愉が餘不亭と
 いふ處で、殺して食はれうとする龜を助けて放して遣つた後、餘不
 亭の領主となつたに就いて、領主の印形を作るに、龜の紐を附けた
 印形を金で鑄させた處が、その龜の首が左へ傾いて居るによつて、
 これを鑄直させたが、また前の通りに首が左へ曲がる都合、四度鑄
 直させたが、四度とも同じやうに曲がる、然るにその首が先年放し
 て遣つた龜が、後を四度も見返つた時の形と誠に能う似て居ると
 ころから、サテは彼の龜が命を助けて貰つた恩を報ずる心で、斯る
 不思議を顯はすのであるかと氣がついたに依つて、首の曲がつた
 儘その印を用ひたといふ。いづれも古い書物に出て居ること、果

して實際であるかドウダカ知れぬけれども、斯る畜類が恩を知つ
 てその恩を報じたことは昔から澤山ある。これは明治十三年九月
 廿五日の事であつたと申す、神奈川県相模國津久井郡牧野村の農
 鈴木藤右衛門が、横濱の或る商人の家へ約束したる玄米三俵を送
 りたるに、當時十八歳になる長男の榮次郎に申し付け、馬を牽いて
 往かせたところが、其夜九時過ぐるまでも歸つて來ないから、どう
 した事であらうと皆々案じて居る折柄、戶外に馬の嘶く聲がいた
 したから、サテハ榮次郎が戻つたのであらうと思ひ、藤右衛門が出
 て見れば、榮次郎は居らずして、馬ばかりいと嬉しげに駆け寄り、袖
 の下に首を差し入れ、頻りに鼻を鳴らすのみか、最前の米俵をその
 儘背負ひ居るを見て、不審に思ひ、後で様子も分からうと、先づ其米
 俵を卸して馬を廐へ入れようとするけれども、跳ね廻り表の方へ馳け
 出さうとして、少しも自由になりませぬから、藤右衛門も如何にも

怪しく思ひ、若し榮次郎の身に萬一の事もありはせぬかと、直ちに次男の與吉と俱に草刈鎌を用心に携へ、馬に向つて榮次郎の處に嚮導せよと云ひ聞せ、繩を放せば常には物に怖るゝ性なるに、さも嬉しげに高く嘶き、尾をふりながら駆け行を便りに、藤右衛門與吉の父子は後に付添へ、横濱への往還筋を澤井村の山道へ差掛からんとする時、馬は忽ち立ち留り、一步も動かさず、頻りに谷間を臨んで悲しむ體に、兩人は不思議に思ひ引けども、打てども更らに動かぬに、始めて心付き、用意の摺付木を點して、其邊を檢べましたるに、路傍に鮮血の滴りあるに、彌よ驚き、草を分け、林を採す中、傍の谷間に人の呻く聲がするより、漸くにして往つて見れば、こはそも如何に榮次郎は赤裸にて手足を縛られ、顔からその他に數ヶ所の疵傷を負ふて倒れて居ましたから、兩人は大いに驚き、種々介抱を致したれば、榮次郎は始めて正氣に復し、父弟の顔を見て、大いに喜びまし

たが、身體の痛さに口さへもきかれず、漸く兩人に扶けられて谷より這い上れば、馬は雀躍して喜ぶ體にて、榮次郎の身體にすりよる背をさしつけ、物は云はねども、乗れよといはぬ許りの舉動に、三人顔見合せて、其志を喜び、やがて榮次郎を馬に乗せ、徐かに家に歸り、早速醫師を招いて、手當を致したれば、少しは痛も減り、遂に全快したといふ。サテどうした事て斯る危いことになつたかといふに、其日榮次郎は、米を負ふた馬を牽いて、横濱へ赴く途中、澤井村の山中にかつゝ、た時樹蔭より三人の強盗見はれ、出て何れも白刃を持つて立塞がり、汝の懷中にある百圓の金を呉れといふから、榮次郎は大に驚き、百圓とは思も寄らず、それは定て人違てあらうと申し、たれば、三人の賊は、矢庭に榮次郎を引倒し、衣類を剝取り、手足を縛り、所持金十五錢を奪ひ、無慘にも遂に谷底へ蹴墜して、何處ともなく逃げ去つたのを、始終を見て居た彼の馬は、直ちに走り歸り、主人

の家いへに告つげ知しらせたのである。牛馬うまでもかく恩おんを知しつて恩おんを報はずるものさへある。まして萬物ばんぶつの靈長たまごといはるゝ人間にんげんたる者ものが恩おんを知らしらならぬ。ことに三世さんぜ諸佛しよぶつの御仲間おんちゆうま入いを致いたした身みで、この大法だいぽうの大恩おんを報はせずしてどうならうぞ。畜類ちよくるいなほ恩おんを報はず、人類じんるい争あてか恩おんを知らしらざらんとの御教訓おんけうくんは即すなはち此處こゝである。

● 参 考

○世間よげんの凡夫ぼんぷ慧眼えいがんなく、恩處おんじよに迷まひ、妙果めうくわを失しつ、五濁ごじやく世諸よせしよの衆生しゆじやうしん深恩しんおんを悟さとらずして恒つねに恩おんに背そむく、我わがれ爲ためめに四恩しおんを開示かいじし、人ひとをして正見せうけん善提道ぜんたいどうに入いらしむ。(親地經)

○恩おんを知しるものは阿耨多羅三藐三菩提あうたろさんみょうさんぼだいを開ひくべし、恩おんを報はずるものは、亦また當あたり一切衆生いっさいしゆじやうしんをして阿耨多羅三藐三菩提あうたろさんみょうさんぼだいを發はかしむべし。(報恩品)

○冬ふゆの夜よの鷹たかの拳こぶしのぬくめ鳥とり
恩おんを知らぬは人ひとにこそあれ

(よみ人しらす)



第二十九節

其報謝は、餘外の法は中るべからず、唯當に日々の行持
其報謝の正道なるべし、謂ゆるの道理は、日々の生命を
等閑はせず、私に費さざらん、と行持するなり。

これは修證義第二十九節であつて、正しく報恩の心得方を御教訓
になるのであります。畜類の雀や龜、馬などの様なものでも、生死の
肉身を助けられたる小恩すら、これを忘れずして、報恩をいたした
とすれば、我々御互は既に受け難き人身を受け、しかも南閻浮の中
に生れ來て、正法眼藏無上大法を相續したる身の上であれば、骨を
碎き身を粉にして御恩報謝を致さなければならぬ様に思はれる
が、今高祖大師の御教訓によれば、決して左様な難行苦行を致すに
は及ばぬ、決して外の事は報謝には當らぬ、只その日々の勤めが
眞實に行持と名けらるゝ様になるのが報恩の正しき道ぢやと仰

せらるゝ、行持とは前にも一寸申して置たことがあるが、つまり爲
ること作す事が、皆佛法を持つ力となるのを、行持と申すのである。
そこを、其報謝は餘外の法は中るべからず、唯當に日々の行持、其報
謝の正道なるべしと仰せるゝ、しからばどうしたらば、日々の勤め
が佛法を持つ力となる、即ち行持と名けらるゝ、ようになるかと云
ふに、謂ゆるの道理は、日々の生命を等閑にせず、私に費さざらん、と
行持するなり、と仰せられて、佛恩祖恩を報謝する道は、毎日く送
つてゆく生命をムダにせず、月日を自分勝手に送り費さぬところ
や、この日々を生命を等閑にせず、私に費さざらん、と行持するなり
といふ二句が行持報恩の一番肝要なる眼目であるから、シツカリ
と間違はぬやうに合點して置いて貰はねばならぬ。サテ我々互
ひが一生涯は古の人が云ふた如く、盥から盥に移る五十年で、生れた
時に盥で産湯をつかひ、死んだ時又盥で湯を行ふ、その間が五十年

か長くて七十年である。しかるに生れてから十五六歳までは只夢
中で過ぐし、少しく物事が分かるやうになつてから三十五年多
くて五十四五年であるが、その三十五年乃至五十四五年間も、三
分の二は寝たり遊んだりして暮して仕舞うのであるから、實際の
處は誠に僅かである。しかるに其僅な歲月の間に爲る事作すこと
は何かといへば、只食ふことと、着ること、その職業こそ種々様々に
違ふて居るにもせよ、その目的は己れや己れの妻子眷屬、僅か自分
に付添ふた五人や十人に、着たり着せたり食ふたり食はせたりする
までのことと、少しも他人の爲め、國の爲めといふことを思はぬか
やうな者は、殆ど禽獸と同じことである。犬猫でも自分で食ひ又そ
の子を育てる、しかるに萬物の靈長といはるゝ者が、只自分や自分
の家族の食ふことや着ること、一生の間齟齬して仕舞うようて
は、姿こそ人間なれ、その心は既に畜類にも劣る。譬へてみれば、その

者の本籍は既に畜生界に移つて仕舞つて居つて、暫く人間界に寄
留をして居るやうなものである。ナント淺ましいことではないか、
かやうな事では人間に生れた甲斐が何處に在る、これを名けて生
命を等閑にすると云ふのぢや、然らば日々の生命をどの様に使ふ
のかといふに、すなはち私に費さざらんと行持するのぢや、私とい
ふは自分勝手の事である。自分勝手は犬猫でも自分の欲はあるか
ら、犬や猫が食物を争ふとなると、敵を噛んでも倒しても構はず、毫
も義理も情もありはせぬ。これは彼等が持前であつて、彼等は義理
も情も知らぬからこそ、畜生界に在るのである。けれども人は決し
てそうでない。人といふ字を分けてみれば、ノへとなる。即ち二個以
上寄合つて始めて、一個の人が成立つて往くのである。それゆゑ人
といふ字を考へても、互人間は互に持つ持つしてゆかねばなら
ぬことが分る。しかるに西洋人と貿易をするに、生絲に木綿糸を混